

身障者サービスワーキンググループ 報告書

(1984. 4. 10)

目 次

経過	18
摘要	19
検討結果	
〔1〕 大学図書館における身障者サービス	19
〔2〕 早稲田大学における身障者の実態	20
1) 在籍数	20
2) 過去の在籍数	21
〔3〕 対象学生との懇談会	23
〔4〕 大学構内における施設・設備・サービス	25
1) 施設・設備	25
2) サービス	27
〔5〕 大学周辺の施設	33
〔6〕 他大学・他機関調査	38
1) 大学図書館	38
2) 公共図書館	40
3) 外国の現状	49
〔7〕 新図書館に必要な機能	52
1) 施設	52
2) 設備	53
3) サービス	58
本館所蔵参考文献一覧	60
収集パンフレット（利用案内等）一覧	74

経過

2月29日に第1回めのミーティングでグループの目標を確認し、活動計画をたてることからはじまり、3月6日、12日、19日、23日、24日、26日と、報告書提出まで7回のミーティングをもった。

前半はおもに資料収集作業を行い、後半は資料検討、報告書作成にあたった。

他機関見学には3月8日、10日、15日、21日の午後をあて、全メンバーが参加した。

摘要

現在早稲田大学には、明らかに解っている限りで10名の身体障害学生がいる。受入学部では入学と同時に対応策を考え、スロープや車椅子用トイレなどを設けてきた。法学部では昭和49年度～56年度に前後して2名の視覚障害学生（全盲）が在籍したことにより、サービス面でも少しずつ改善がなされたが、全学的な処置までには至らなかったようである。

これまで図書館側の対応は全くなく、図書利用の問題が生じなければ、学生の存在すら知らないという状態は今後なくしていかななくてはならない。東京大学のように、1人の障害をもつ学生の入学によって、学部のみならず、図書館もすぐに対応していくようなシステムを、今後検討すべきである。

〔1〕 大学図書館における身障者サービス

大学図書館は、大学の目的である教育研究を全うするために、図書資料および学術文献に関する情報を広く収集・管理し、それらを提供する場である。すべての研究者・学生の要求に答えようとする努力は、もちろん、身体に障害を持つ利用者の要求に対してもなされなければならない。

長い間、身障者への各種サービスは十分に行われなかったが、社会福祉行政の発展、市民の権利の主張に伴い、種々の公的サービスが当然のサービスとしてなされるようになり、また、多くの市民ボランティアの協力も得られてきている。

しかし、大学図書館においては、公共図書館よりはるかに遅れた状態であると言わざるを得ない。ごく少数の身障学生へのサービスが特殊なサービスとみなされ、必要性は認められながらもその対策はあと回しにされてきた。近年、少しずつではあるが身障者への大学の門戸開放が進んできているし、入学者も増えてきている。大学図書館はこのような社会的状況に対して今後どのような対応をしていかななくてはならないのだろうか。

身障者サービスを考えるにあたって留意すべきことは、それがごく少数の利用者を特別に優遇しようとするのではなく、他の利用者と同じように図書館を利用できる方法を考えようとするものであるということである。身障者サービスのために係や要員を配置すれば済むということではなく、図書館サービスの原点として日常業務の中で見直され、実行されていく問題として考えられなければならない。身障者サービスの充実が、図書館全体のサービスの充実を促すものであって欲しい。

障害者の「完全参加と平等」を謳った国際障害者年は1981年であった。その精神をふまえて、大学図書館における具体的課題の一つとして、この身障者サービスの問題を考えていかなければならない。

なお、図書館における身障者サービスの歴史については、渡辺勲（参考文献Ⅰ—3 p.106—127）「日本における図書館の障害者サービス年表」を参照されたい。

〔2〕 早稲田大学における身障者の実態

1) 在籍数（昭和59年3月現在）

各学部事務所、学生部に問い合わせた結果は次の表のとおりである。

在籍数		学部別在籍数	
視覚障害者（全盲） 弱視	2名	政経	1名
聴覚障害者（難聴）	2名	法	1名
肢体障害者（車椅子） 松葉杖	6名	一・二文	7名
計	※10名	商研	1名
		計	※10名

※昭和58年に教育学部を退学した聾啞の学生1名は含まれていない。

上の数字は、入学後学部事務所に申し出た者で、入学試験で特別な配慮を受けた者も含まれる。在学生全体からみるとかなり少ない数字であるが、障害が軽いなどの理由により申し出ていない学生も何人かいるはずである。なお、今年度視覚障害（全盲）の学生がひとり法学部に合格した。

また、教職員の中にも対象となる者がいるであろうが、その数はつかめていない。

『講座新図書館学Ⅰ』（参考文献Ⅰ—10, p.190～191より）

視覚障害者とは、身体障害者福祉法では視覚障害者を次のように規定している。

- ① 両眼の視力がそれぞれ0.1以下のもの。
- ② 1眼の視力が0.02以下、他眼の視力が0.6以下のもの。
- ③ 両眼の視野がそれぞれ10度以内のもの。
- ④ 両眼による視野の2分の1以上が欠けているもの。

また身体障害者福祉法施行規則では障害程度を次のように分けている。

1 級	両眼の視力の和が0.01以下のもの
2 級	両眼の視力の和が0.02以上0.04以下のもの
3 級	両眼の視力の和が0.05以上0.08以下のもの
4 級	1. 両眼の視力の和が0.09以上0.12以下のもの 2. 両眼の視野がそれぞれ5度以内のもの
5 級	1. 両眼の視力の和が0.13以上0.2以下のもの 2. 両眼の視野がそれぞれ10度以内のもの 3. 両眼による視野の2分の1以上が欠けているもの
6 級	1. 眼の視力が0.02以下他眼の視力が0.6以下のもので、両眼の視力の和が0.2を越えるもの

岡田明『聴覚障害児の心理と教育』p. 21より

聴覚障害の程度による分類（草薙進郎氏による分類）

分 類	聴力損失 (両耳)	音・声に対する反応
正 常 耳	0～20 dB*	ささやき声まで完全に聞きとれる
軽度難聴	20～40 dB	静かな会話が聞きとれなかったり、聞き違えたりする
中度難聴	40～60 dB	普通の会話がやっと聞きとれる**
高度難聴	60～90 dB	大声しか聞こえず、大声でも正しく聞きとれない
ろ う	90 dB 以上	かなり大きな音ならどうにか感じることができる

*dB(デシベル)は音の強さを表す単位 **補聴器使用の必要がある(40 dB 以上)

2) 過去の在籍数

視覚障害者を例にとると以下ようになる。

入学年度	学 部	入試時点の 使用文字	入試方法
昭和24年	※政治経済学部	点字	口頭試問
〃	第二文学部	〃	〃
〃	〃	〃	〃
25	教育学部	点字・普通字	普通受験
28	第二文学部	点字	面接
31	〃	〃	〃
33	〃	〃	口頭試問

38	第二文学部	点字	口頭試問
〃	※政治経済学部	普通字	普通受験
39	第二文学部	点字	口頭試問
41	〃	〃	点字受験
48	社会科学部	普通字	普通受験
49	法学部	点字・普通字	〃
〃	〃	点字	点字受験
52	〃	〃	〃
58	第二文学部	普通字	普通受験
〃	〃	点字	点字受験

※ 24, 38年度の政経入学者については一・二政の別不明。

指田忠司編『123ページの伝言』（参考文献Ⅱ－2），文部省大学局「大学入学者選抜実態調査」をもとに作成。

早稲田大学では，視覚障害者の進学希望に対して，昭和41年第二文学部で初めて点字受験が認められて以来，昭和44年第一文学部，昭和46年には法学部で認められた。それ以前の入学者は，口頭試問，面接によった。

文部省大学局大学入学者選抜実態調査（昭和56年度）

身体に障害を有する者等の入学者に対する施設・設備の整備状況（大学）

区 分	何らかの整備を行っている大学数	整 備 内 容 の 例							備 考
		エレベーター	トイレ	スロープ	手 摺	点字図書等	オプタコン		
国 立	61校	27校	45校	51校	18校	4校	5校		
公 立	12	3	8	9	2	3	2		
私 立	77	25	52	37	26	12	0		
計	150	55	105	97	46	19	7		

（注） 1. 「整備内容の例」としては，上記の外，自動扉，点字ブロック，独習室（自習室），専用駐車場，車椅子等の整備を行っている。

2. 上記の整備状況は，56年度大学入学者選抜実態調査を行った時点までの数である。

身体に障害を有する者等の入学状況

区 分		視 覚		聴 覚		肢 体 不 自 由 者			小 計	そ の 他			合 計
		障 害 盲 者	弱 視 者	障 害 聾 者	難 聴 者	上 肢 不 自 由 者	下 肢 不 自 由 者	そ の 他		言 語 障 害	病 弱 虚 弱	そ の 他	
大 学	国立	人	人 3	人 3	人 15	人 5	人 13	人 7	人 46	人 23	人 2		人 71
	公立	1			1	1	1	1	5		2		7
	私立	9	100	6	123	35	53	77	403	14	232	78	727
	計	10	103	9	139	41	67	85	454	14	257	80	805
短 大	国立		1		3			2	6				6
	公立			2				1	3	2			5
	私立	1	9	6	27	9	5	34	91	5	31	22	149
	計	1	10	8	30	9	5	37	100	7	31	22	160
合 計		11	113	17	169	50	72	122	554	21	288	102	965

〔3〕 対象学生との懇談会

3月12日（月） ワーキンググループメンバー全員で、前の週に大急ぎで連絡をとった対象学生との話し合いを持った。

文学部の教育学専攻の鈴木陽子助教授が特殊教育がご専門の関係で、学生達とも親しいことから当日、ご出席いただき私達の対応の不備の点などいろいろご指導願った。事務長からも今後、前向きに取り組んでいきたい旨の簡単な挨拶があった。

出席者 Aさん（一文1年 聴力障害）

Bさん（政経3年 聴力障害 政経学部事務所に問い合わせた時には彼の存在を知らされなかったが、Aさんが同じ手話サークルに属していることから連絡してくれた）

Cさん（一文3年 高等学院の時ケガの為、歩行困難に。数年の休学の後、復学。車椅子利用）

他に手話サークルの学生2名が通訳にきてくれた。他の方達は病気や連絡がつかなかったりでお集りいただけず、特に視力障害の方が参加できなかったのが後日電話で伺った。

通常、本館でよく本を借りるのはBさんだけで、図書館利用についてよりも大学における生活全般についていろいろ伺った。学内に障害を持つ学生が何人いるかも

知らず、図書館利用の方法等のアドバイスをすることも考えなかった怠慢な館員である私達を非難もせず、今後の協力を約束してくださり、本当にありがたいことであった。これからの勉学の役に立つよう、少しでも多く、図書館や館員が対応できるようにしていきたい。

話し合ったことの中から図書館に関係のある事柄を簡単にまとめてみたのが次の表である。

	Aさん（女性）	Bさん（男性）	Cさん（男性）	Dさん（女性） （電話による聞き書き）
障 害	聴力	聴力	肢体不自由	視力（全盲）
図 書 館	閲覧席のみ利用する	よく利用する	館内に入れない	利用していない
学生読書室	よく利用する	よく利用する	利用することもある	利用することもある
他 館	余り行かない	都立中央図書館	行かない	日本点字図書館 杉並区中央図書館 （点字図書・対面朗読利用）
利用上困ること	呼出し	呼出し （申し出て目立ちすぎるのも困る）	車椅子が入れない	文献検索 必要な箇所だけ探すのが困難
そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> 受付に身障者のための案内板があると気が楽になって申し出易い 銀行の呼出掲示のような電光板があると便利 	<ul style="list-style-type: none"> 目録等コンピューター検索ができると便利 シルバーホンを設置して欲しい（図書館内でなくともよい） 	<ul style="list-style-type: none"> 便利になるのは嬉しいが自分だけのためにお金を使われるのは負担になる トイレは最新式の全自動のものでなくとも安全第一がよい カードがひけないのでコンピューター検索ができるとよい 	<ul style="list-style-type: none"> 専攻課程になったら読まなくてはならない本が増えるので図書館の本を借り出せるとよい
ワーキンググループからの提案	館員で何人か手話をはせるようになるとよい（館員でも数名が希望）		郵送貸出・所属学部図書館への貸出等も考えられる	電話によるレファレンスの受付や図書の特別貸出が認められればよい

初めての話し合いの機会でもあり、ゆっくりと口を大きく開けて話すことに慣れていない私達との話し合いで利用者も十分に希望を述べたとは言いがたく、以上は双方の話し合いの中で出てきたことをまとめたに過ぎない。障害の違いによって自

ら要望や困難な点も違ってくるし、図書館側の一方的な考えによる実行ではなく利用者の希望もこれから何度も聞いていかなければならない。特に学生読書室については皆利用したことがあるのに図書館の利用は少ないのは、利用方法やレファレンスを受けられること等が知らされていないためもあり、オリエンテーションの方法等も今後考えなければならない。

なお、今回は手話サークルの方にお世話になったが、他に点字会もあり、多くの学生が障害のある仲間と、ともに助け合い学び合っている。

『学生の手帖』1984年版によれば、手話サークルは8号館地下、点字会は10号館裏にある。

〔4〕 大学構内に於ける施設・設備・サービス

1) 施設・設備

(1) 図書館内

対応なし

(2) 本部構内（営繕課問合わせ）

- ① 11号館商学部北側階段→スロープ（5～6年前商学部よりの依頼）
- ② 10号館入口階段→スロープ
- ③ 12号館入口階段→スロープ
- ④ 7号館北側階段→スロープ（教務課よりの依頼）
- ⑤ 8号館西側階段→スロープ（法学部よりの依頼）
- ⑥ 9号館前車椅子用電話ボックス（昭和58年春、商学部よりの依頼）
- ⑦ 診療所入口→仮設スロープ

(3) 戸山町構内（文学部問合わせ）

- ① 側溝上の仮設スロープ
- ② 渡り廊下出入口の仮設スロープ
- ③ 車椅子用トイレ（昭和57年春、32号館トイレ改修時に設置）
- ④ 生協前車椅子用電話ボックス（昭和57年、学生よりの希望）
- ⑤ 身体障害学生用控室兼自習室（昭和58年夏、二文よりの要請で一文学生との共用）

(4) 大久保構内

対応なし

以上の施設、設備の位置は26頁の図を参照されたい。

2) サービス

法学部：昭和49年度～56年度に前後して2名の視覚障害学生（全盲）在籍。

視覚障害学生のための自習室を9号館に用意。

点訳辞書の購入。

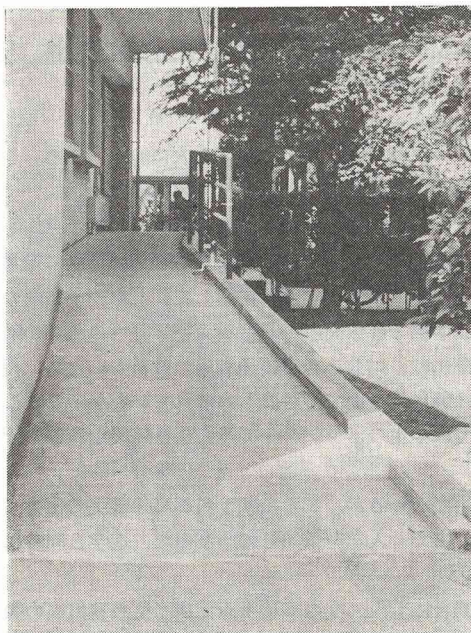
T. A（ティーチング・アシスタント）2名（1人につき）採用。

文学部：昭和58年度、点訳辞書購入を図書館に依頼。文学部に借受け。

〔2〕の実態にもあるとおり現在大学には明らかに解っている限りで10名の身体障害学生がいる。もう1名教育学部に聾啞の学生が在籍していたが昭和58年秋に退学届を提出している。商研の研修生は前年度まで商学部在籍していた車椅子利用の学生でこの学生の学部在籍当時に商学部では数箇所の教室および学読への入口の階段にスロープをつけている。商学部には、以前から車椅子利用の教員もいたが、授業の教室を1階にするなど以外には特に施設面での手直しはされていなかった。この学生が入学してからも、しばらくは学生のボランティア達により階段を運び上げたりしていたようである。

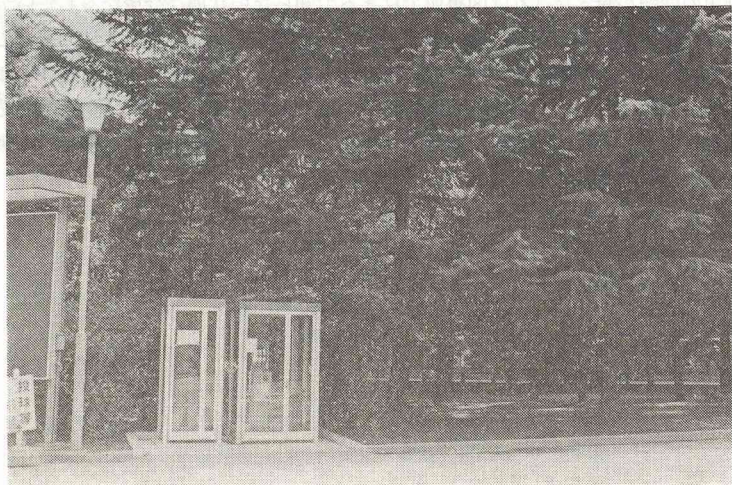
文学部にも現在2名の車椅子利用者がいるが、こちらは1名が高等学院の出身者ということもあり、事前に事務所の方でも入学を承知していたので、進学と同時に対応策を考えたようである。

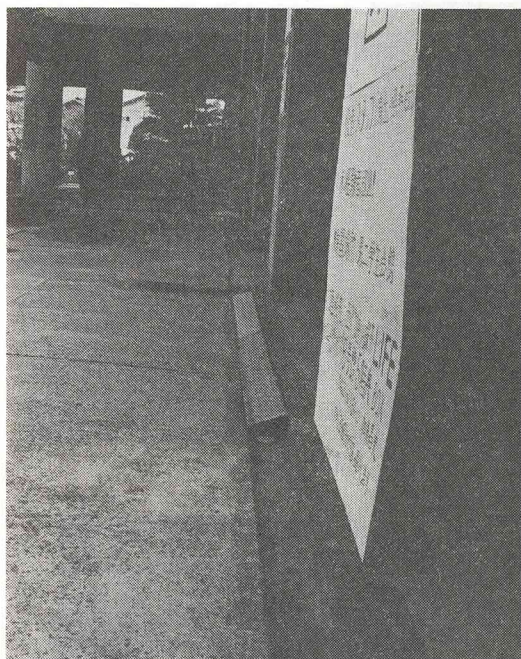
二文に58年度に入学した学生の場合にも、二文の事務所および二文教務担当の教員で対応策を検討している。十分な処置とはいえないが、障害を持つ学生が入学し勉学していく中で、少しずつでも改善がなされていくのは望ましいことである。ただし、これらの学生の存在を必ずしも学部全教職員が知っている訳ではない。図書利用の問題が起きなければ図書館ではまるで知らない状態は今後なくしていかなければならない。東京大学の場合のように1人の障害を持つ学生の入学によって学部のみならず、図書館もすぐに対応していくようなシステムを今後持たなければならない。そのためには、日本点字図書館の職員の方の要望のように、全学的な受入委員会を持ち、それに図書館も積極的に参加していく方法を早急に大学当局に検討申し入れをすべきである。



12号館
商学部学生就書室等入口

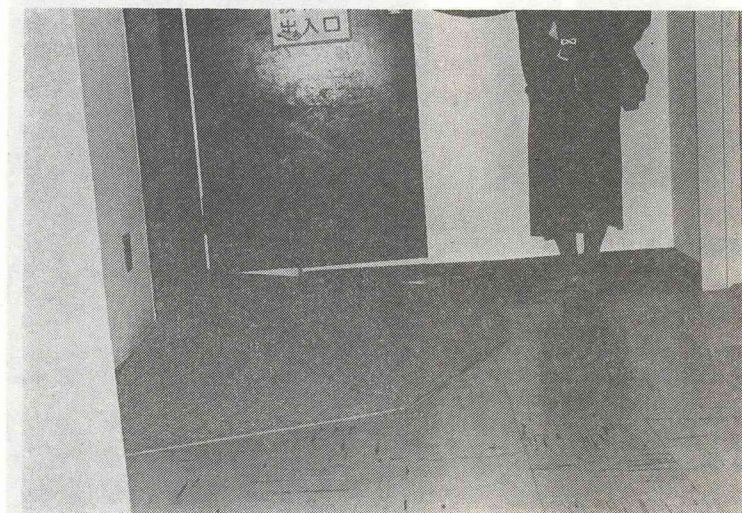
9号館前 右側が車椅子用電話ボックス

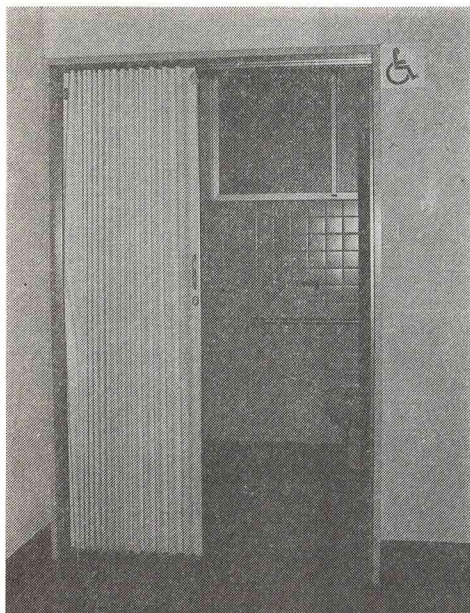




文学部構内
側溝上の仮設スロープ

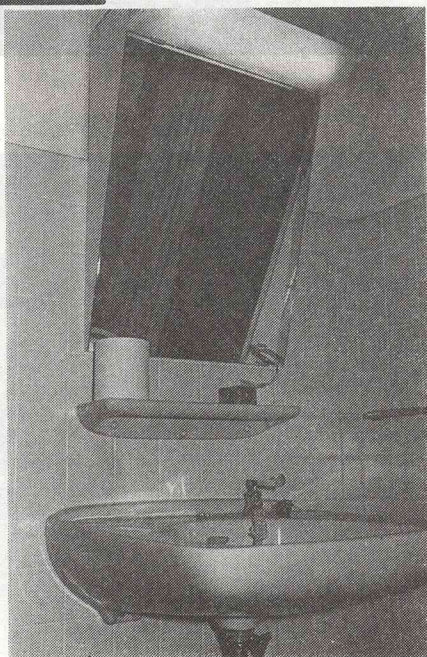
文学部構内 渡り廊下出入口の仮設スロープ

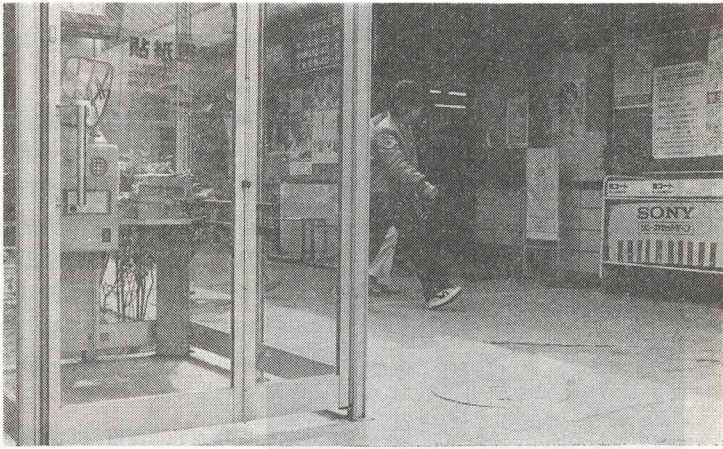




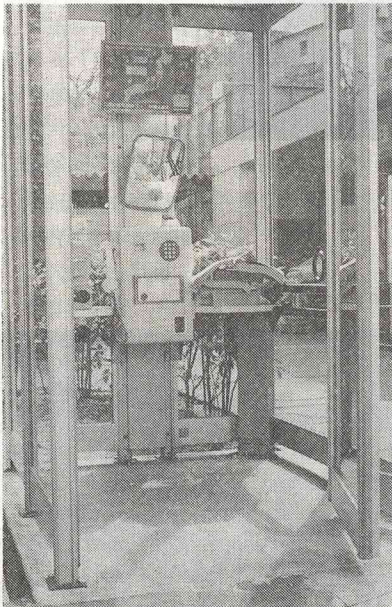
文学部構内
車椅子用トイレ

文学部構内車椅子用トイレ
内部の斜面になった鏡





文学部構内 生協前車椅子用電話ボックス



『テレホンガイド東京 昭和57年
10月』p298 より

車いす使用のまま利用できる構造とスペースを備えた、便利な公衆電話ボックスです。

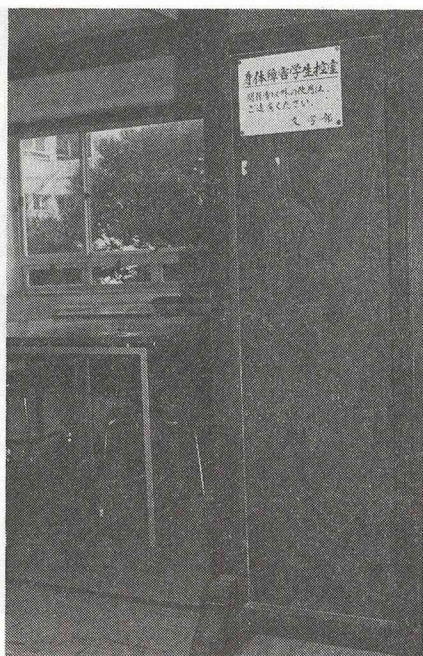
●めじるし

公衆電話ボックスの前扉に、身体障害者用のシンボルマークが貼付してあります。



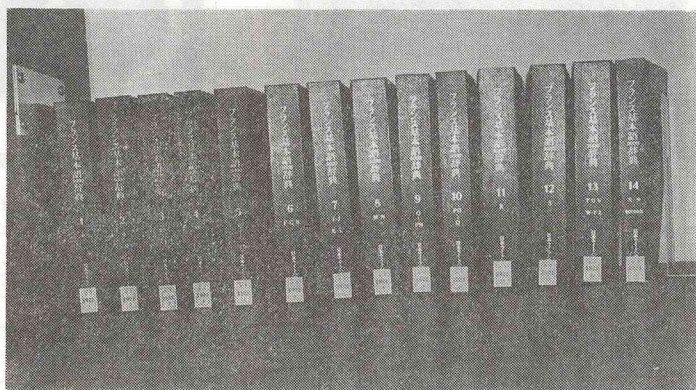
●特長
ご利用し易いように次の設備を備えてあります。

1. 扉が開き易くなっています。
2. 電話機の取り付け位置を低くしてあります。
3. 硬貨投入やダイヤルするとき送受器を置いておける台を備えてあります。
4. 退出を容易にするための手すり、後方安全確認用鏡および扉開閉用ロープを備えてあります。



文学部構内
身体障害学生用教室兼自習室

文学部に移管したフランス語点訳辞書



〔5〕 大学周辺の施設

新宿区内には多くの福祉施設や視覚障害者の利用できる図書館等があり、これらの施設を学生は上手に利用しているようである。ただし図書館としては今までこれらの図書館を大学の学生が利用し、恩恵をこうむっていることも知らなかった訳で、周辺施設の内容等もよく知り新入生への利用案内をしたり、参考室などで適切な紹介が出来るようになることが望ましい。

大学周辺では、新宿区立中央図書館、戸山図書館は車椅子利用者の来館可。対面朗読、録音テープの郵送貸出サービスも行っている。他に、高田馬場には日本点字図書館、東京ヘレンケラー学院の点字図書館などがある。

日本点字図書館 (1984.3.15訪問、松川壮夫氏より説明を受ける。)

日本点字図書館は、昭和15年、本間一夫氏(全盲)によって創設された。

二文在籍の全盲の学生、Dさんもよく利用しているとのこと、視覚障害の受験者があると学部から点訳の相談や依頼に各々訪れているとのことだが、学部により受入態勢がバラバラなので、大学として、どこか一本に統一して検討してはもらえないかという要望がまず出された。

視覚障害の人が本を読む場合には、次のような方法がある。

1. 録音テープを利用
2. 対面朗読を利用
3. 大型活字本を利用
4. 点訳図書を利用
5. 機器を利用

厚生省の昭和54年の調査では、国内の視覚障害者は、336,000人。その半分以上が弱視(矯正視力が0.3~0.04)と推定されている。学生の中には入学時に申し出ていない弱視の学生もかなりいるものと思われるが、大学内には、現在どこにも大型活字本や拡大読書器は置かれていない。ただし、日本点字図書館でも弱視の人までは現在対象にしておらず、都内の公共図書館でも昭和57年度調査で拡大写本所蔵館は6館に過ぎないし、拡大読書器も数館が持っているに過ぎない。

日本点字図書館でのサービスは現在

1. 文献検索、レファレンス
2. 録音テープ、点字図書貸出 { 昭和57年度 録音テープ貸出54万巻
(9割以上が郵送による貸出) 点字図書貸出 7万巻
3. 対面朗読 (殆どの場合、聞き手がテープに入れる)
4. 点訳 (点訳の場合、1人の盲人に2桁数の点訳者が必要と言われる)

が行われている。テープはあとで、必要箇所を読み返すのが大変だが、点字図書は普通の新書本1冊が点訳本3冊程になり、量が多くなるので、テープや対面朗読サービスを受ける人が年々増えている。

本を全巻テープに録音してしまう場合には著作権者の承認が必要である。殆どの場合、対面朗読の内容も利用者はテープに入れるのでその処理方法については注意が必要とのこと。設備面でも点字による表示も、出ていることが解らなければ無意味。点字ブロックも町の人の理解と協力がなければ、かえって危険な場合もあるとのことで見せかけだけの効果を狙ってはいけなと言われて。実際、高田馬場駅から日本点字図書館まで道順にずっと点字ブロックが敷いてあるが、このブロックについては初めての人にとってはあった方がよいが、慣れた人にとっては、余り必要でないという話をあちこちで聞いた。東京大学総合図書館の河村氏の話では、ヨーロッパやアメリカでは、使用されておらず日本独自の考案によるものとのことである。

先に述べたDさんは、小学生の頃から、ここを利用しているとのことだが、一般書に重点が置かれているので専門書を読むようになった場合には、大学図書館での対応が進んでいかないと問題が起きてくるに違いない。

国立国会図書館での録音サービスもこの窓口を通じて申し込んでいたそうで、早稲田大学図書館でも窓口を開いている旨を連絡した。全国からの利用者の多さ、日本点字図書館の職員の方々の仕事量を思うと、自分の大学の学生の図書利用については当然こちらが、もっと責任を持たなければならないと思わざるを得なかった。

43年のあゆみ（『日本点字図書館事業案内』より）

昭和15年 本館創立。蔵書700冊。

昭和18年 建物落成。（昭和20年戦災により焼失）

昭和19年—22年 疎開先で郵送による図書全国貸出し継続。

昭和23年 焼跡に仮建築で再出発。蔵書三千冊。

昭和25年 財団法人の設立認可。昭和27年社会福祉法人となる。

昭和29年 厚生省から点字図書の製作事業を委託される。蔵書一万冊。

昭和33年 テープライブラリー発足。テープ50巻。

昭和35年 中途失明者のための点字教室開始。

昭和37年 東京都からテープ図書の製作事業を委託される。

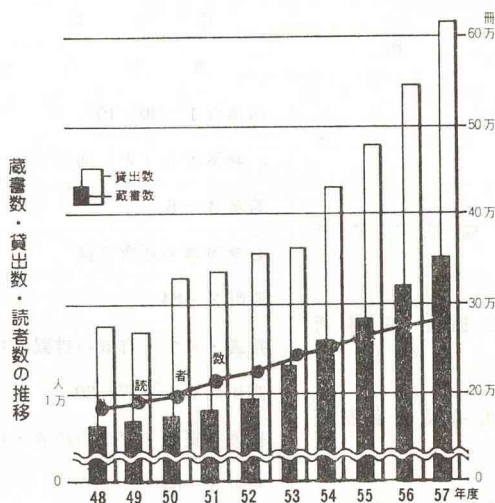
昭和41年 盲人用具部開設。

昭和48年 点字図書のサーモフォーム複製開始。

昭和51年 テープ図書のカセット化に着手。

昭和55年 創立40周年式典挙行。増改築工事完成。蔵書は点字テープで28万冊。

昭和57年 点字・録音図書貸出数年間60万冊をこえる。



なお周辺では現在、戸山町（国立身障害者センター跡）に区立障害者福祉センター（仮称）が建設されており、図書館もできる予定である。また飯田橋には社会福祉総合センター（仮称）の設置が予定されており、電算機利用による情報収集サービス等も目指しているとのことで、それらの新しい施設のサービス利用も今後検討していかなければならない事項である。

知っておきたい区内障害者施設（公私立）等

名 称	所 在 地	電 話
	事 業 の 概 要	
区 立 あ ゆ み の 家	西落合 1—30—10	953—5534
	心身障害者（児）通所訓練	
区 立 四 谷 福 祉 作 業 所	若葉 3—6	359—0844
	心身障害者通所訓練	
新 宿 区 原 町 福 祉 事 務 所	原町 3—84	341—6251
	援護・更生・育成の措置・相談	
新 宿 区 高 田 馬 場 福 祉 事 務 所	高田馬場 1—17—20	205—1281
	援護・更生・育成の措置・相談	
(福)新宿区社会福祉協議会	原町 3—84	341—7180
	ボランティアコーナー	
あ す な ろ 印 刷	三栄町22	357—6655
	身体障害者通所訓練	
あ し た 作 業 所	三栄町22	358—0007
	精神薄弱者通所訓練	
東京都心身障害者福祉センター	戸山 3—17—2	203—6141
	心身障害者相談・判定・訓練	
東京都児童相談センター	戸山 3—17—1	208—1121
	児童相談・診断・治療指導	
東京都補装具研究所	戸山 3—17—3	203—6141
	補装具の研究	
(財)東京都心身障害者 職 能 開 発 セ ン タ ー	戸山 3—17—2	202—7285
	職業訓練・職業あっせん・指導	
(福)日本盲人職能開発センター	本塩町10—3	341—0900
	職業訓練・指導・職業開発	

(福)東京ヘレン・ケラー協会	大久保 3—14—20	200—0525
	ヘレンケラー学院・点字図書館・点字出版	
(福)日本点字図書館	高田馬場 1—23—4	209—0241
	点字図書館・生活用具の開発普及	
(福)日本盲人会連合 日本盲人福祉センター	高田馬場 1—10—33	200—0011
	更生相談・点字図書館・点字出版	
(福)鉄道弘済会 東京身体障害者福祉センター	北新宿 3—27—2	371—0024
	更生相談・訓練・義肢装具の研究	
(福)全国心身障害児福祉財団	西早稲田 2—2—8	203—1211
	中央愛児園・全国療育相談センター	
(福)身体障害者自立情報センター	新宿 4—2—23	354—6219
	自助具の収集展示・就労相談	
(財)富士福祉事業団	新宿 5—12—5	354—0648
	ボランティアスクール・相談	
日本チャリティ協会	四谷 1—22	353—5942
	東京都心身障害者休養ホーム利用受付	
身体障害者雇用促進協会 障害者雇用自立センター	新宿 4—2—3	354—1247
	障害者雇用の相談・改良作業機器展示	

『わたしの便利帳84—85 新宿区』より

[6] 他大学・他機関調査

1) 大学図書館

	東京大学総合図書館	筑波大学附属図書館	東京都立大学 附属図書館
調 査 方 法	見 学	アンケート	見 学
在 籍 数	視覚障害（全盲） 1名	視覚障害2名，聴覚 障害7名，肢体不自 由11名，その他10名	視覚障害（全盲） 2名
施 設	手すり付き洋式トイレ（車椅子での使用は不可）	スロープ 車椅子用トイレ 車椅子通行可能な書 架間隔 専用駐車場	スロープ 車椅子用トイレ 視覚障害者閲覧室
設 備		エレベーター	自動ドア
備 品	点字図書 録音テープ 拡大読書器 録音機 Brailink（点字図書 製作機） パソコン	録音テープ 拡大レンズ	点字図書 録音テープ 録音機 点字タイプライター 点字複写機（サーモ フォーム）
サ ー ビ ス	館員ボランティアあり 対面朗読 録音テープの作成 点訳		ボランティア20名 対面朗読 録音テープの作成
そ の 他	障害者入学時に「身体障害者問題検討小委員会」が設置された	学内連絡バスに車椅子利用者用装備（昇降及び固定装置）を設置 利用者用エレベーター・研究個室・セミナー室・視聴覚室の各入口にライムテープによる点字標示をしている	大学構内に点字ブロックを敷設
参 考 文 献	『東京大学総合図書館における「ハンディキャップサービス」の構想』（答申）		

※印は、新図書館完成後見学

和光大学 附属梅根記念図書館	慶応義塾大学 三田情報センター	上智大学中央図書館	国際基督教大学 図書館
※見 学	見 学	※見 学	電 話
視覚障害 8名		視覚障害(弱視) 2名 肢体不自由 1名	視覚障害(全盲) 1名
段差のない入口 車椅子用トイレ 車椅子通行可能な書 架間隔 対面朗読室4室	スロープ 車椅子用トイレ 車椅子通行可能な書 架間隔	スロープ 車椅子用トイレ 対面朗読室	スロープ 車椅子用トイレ(考 慮中)
自動ドア エレベーター 低いカウンター 車椅子のまま利用出 来る机(全)	自動ドア エレベーター	自動ドア エレベーター	
点字図書 録音テープ 録音機 拡大レンズ 点字タイプライター 点字による館内案内 図			点字図書(辞書類) 点字タイプライター
対面朗読			対面朗読のための部 屋を適宜提供する用 意あり
学生生活課が「障害 者の学内生活に関す る懇談会」を開いて いる		「障害者受入委員 会」がある 学内に介添組織があ る	点訳のための原本の 貸出等に「点訳サー クル」が協力
『和光学園の五十 年』 『和光大学人文学部 紀要』14 『図書館界』27(6)			『明日への大学、そ の1つの歩み—IC Uにおける一盲学生 の記録』

2) 公共図書館 調査方法は見学と文書による回答

	国立国会図書館	都立中央図書館
利用登録者数	録音申込受付は全国の公共図書館、点字図書館、大学図書館のうち184館（早稲田大学図書館も協力館になっている）	視覚障害160名
施設	スロープ 車椅子用トイレ 専用駐車場 録音室（6室）	特別入口 車椅子用トイレ 特別図書室（対面朗読室・録音室）5室
設備	自動ドア	自動ドア エレベーター（点字表示）
備品	出版点字図書、録音テープ、大活字図書、録音機、車椅子	点字図書、録音テープ、大活字図書、録音機、テープ複製機、拡大レンズ、拡大読書器、点字タイプライター、車椅子、盲人用誘導マット
担当係	参考書誌部視覚障害者図書館サービス協力室	資料部参考課視力障害者奉仕担当、専任職員3名、朗読者・点訳者100名
サービス	学術文献の録音テープ作成と貸出（実施にあたっては、図書館等関係諸機関と協議、録音テープの作成は主として館外の適任者であるが館員の録音員もいる）	専門書の録音テープ作成と郵送による貸出（市販のテープは購入しない） 対面朗読 点訳サービス
作成された目録等	『学術文献録音テープ作成の手引き』 『国立国会図書館製作録音図書目録』（季刊・年間版・累積版等）（墨字） 『 “ ” 』（2年刊、累積版）（点字） 『 “ ” 』（テープ版） 『点字図書・録音図書全国総合目録』（半年刊）（墨字） 『録音図書全国総合目録1958～1980』（墨字）	『録音カセットテープ・点訳図書目録』
参考文献	『国立国会図書館年報 昭和57年度』 『国立国会図書館月報』248 『図書館雑誌』70(5) 『図書館界』27(6) 『びぶろす』32(8)	『講座新図書館学1』 『現代図書館学講座6』 『ひびや』111 『図書館雑誌』68(2) 『図書館の窓』19(12)

参考文献は上記のほかに、『としょかんサービスこれからの課題——障害者と読

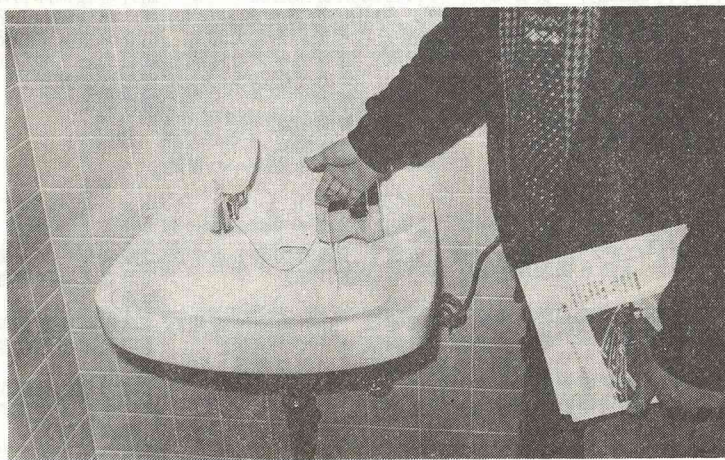
新宿区立戸山図書館	港区立みなと図書館	日野市立図書館	埼玉県立川越図書館
視覚障害79名	視覚障害32名	視覚障害37名 肢体不自由3名	視覚障害221名(県立久喜図書館と共通)
スロープ 車椅子用トイレ 階段に点字ブロック	地下鉄出口より入口 まで点字ブロック 段差のない入口 スロープによる非常 階段 車椅子用トイレ(各 階) 対面朗読室 録音室 車椅子の通れる書架 間隔	スロープ 車椅子用トイレ 車椅子の通れる書架 間隔	駅より入口までと、 入口より対面朗読 室までに点字プロ ック 段差のない入口(盲 導鈴付) 車椅子用トイレ 対面朗読室(録音室) 車椅子の通れる書架 間隔 専用駐車場
自動ドア	自動ドア エレベーター(点字 表示, 各階停止ア ナウンス) 低いカウンター	自動ドア エレベーター 低いカウンター	自動ドア エレベーター
点字広報, 録音テー プ, 大活字図書, 市 販テープ, 録音機, テープ複製機, 点字 タイプライター, 盲 人用附近案内図, 「わ たしの便利帳」(テー プ版・点字版)	点字図書, 録音テー プ, 大活字図書, テ ープ複製機, 録音機, 点字による館内案内 図, 拡大レンズ, 車 椅子用机, 車椅子	点字図書, 録音テー プ, 大活字図書, 拡 大写本, さわる絵本, 録音機, 拡大読書器, 拡大レンズ, 車椅子	録音テープ, 大活字 図書, 録音機, テー プ複製機, 拡大読書 器, 拡大レンズ, 点 字タイプライター, レーズライター, 立 体現像機, 点字タイ プ, 点字による館内 案内図, 車椅子
担当者(奉仕主査), 他兼任職員1名, ボ ランティア54名 録音テープの作成と 貸出(含郵送) 対面朗読 『声の図書館だよ り』を年4回発行	視聴覚係声の図書担 当, 専任職員2名 ボランティアあり 録音テープの作成と 貸出(含郵送) 対面朗読	業務係朗読サービス 担当, 専任職員なし, ボランティア52名 録音テープの作成と 貸出(配達または来 館) 対面朗読 家庭配本 障害者施設への貸出	館外奉仕部障害奉仕 課, 専任職員3名, ボランティア71名 録音テープの作成と 貸出(含郵送) 対面朗読
『カセットテープ目 録』	『録音図書・市販テ ープ目録』	『録音図書・点字図 書目録』	『録音テープ一覧』 (県立久喜図書館と 共通)
「区立図書館案内 (新宿区)」	「港区新図書館建設 基本構想基本計画策 定に関する答申」(昭 和52年8月22日, 港 区新図書館建設委員 会) 図書館雑誌75(1)	「日野市立図書館の サービス実績」 『図書館雑誌』75(1)	「講座新図書館学1」 『現代図書館学講座 6』 『障害奉仕業務関係 資料集』(埼玉県立 川越図書館) 『図書館雑誌』75(1)

者権』の巻末資料「全国のサービス内容と設備の実態調査表」を利用

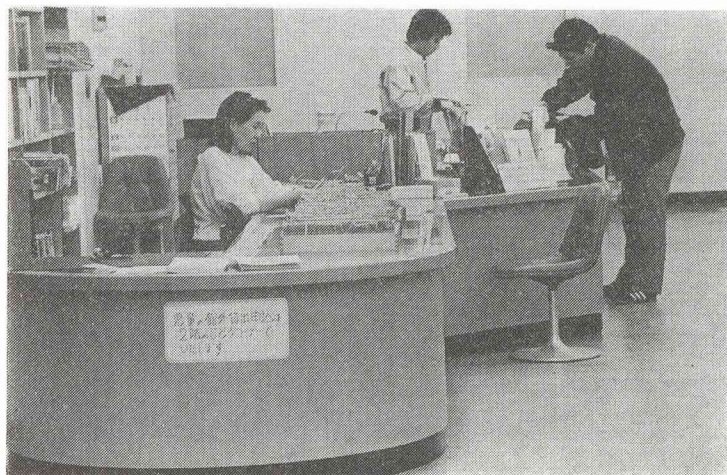
最新式車椅子用トイレ（港区立みなと図書館）



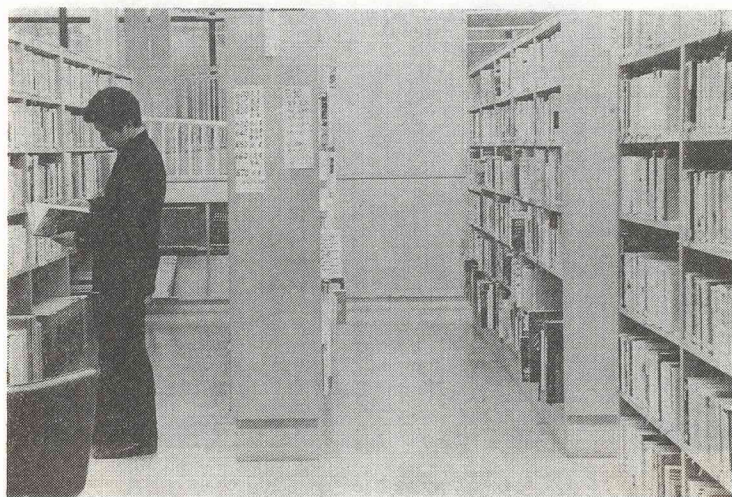
光センサーシステムによる手洗器（港区立みなと図書館）



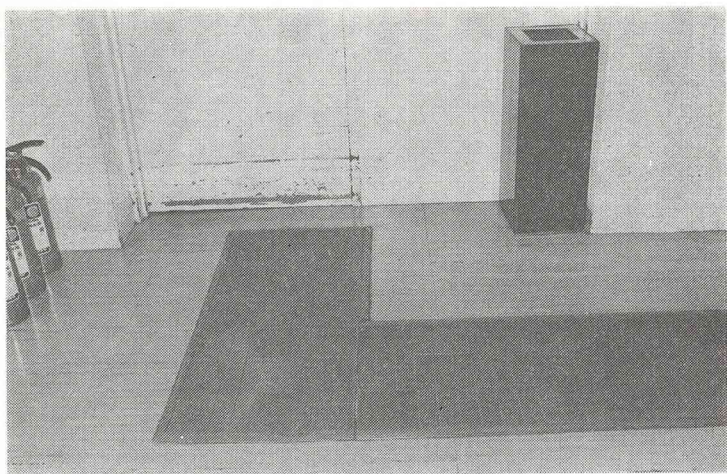
低いカウンター（港区立みなと図書館）



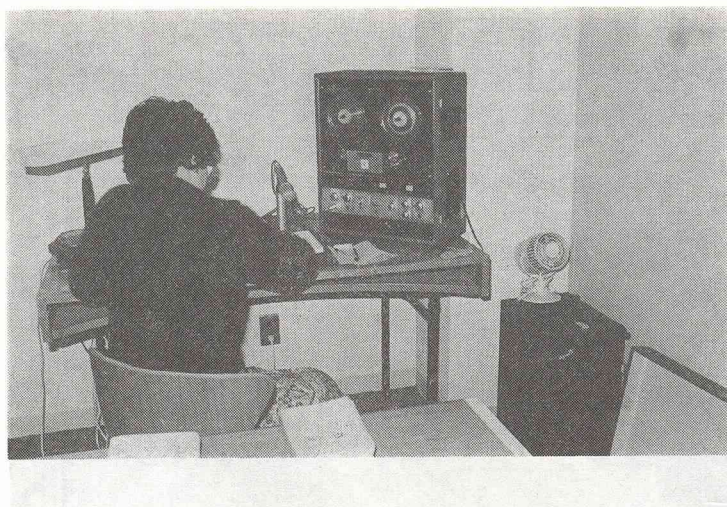
車椅子利用可能な書架間隔（港区立みなと図書館）



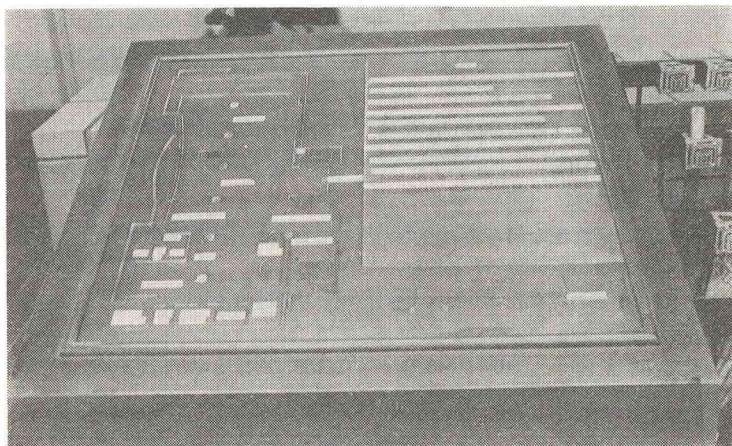
点字誘導マット（都立中央図書館）



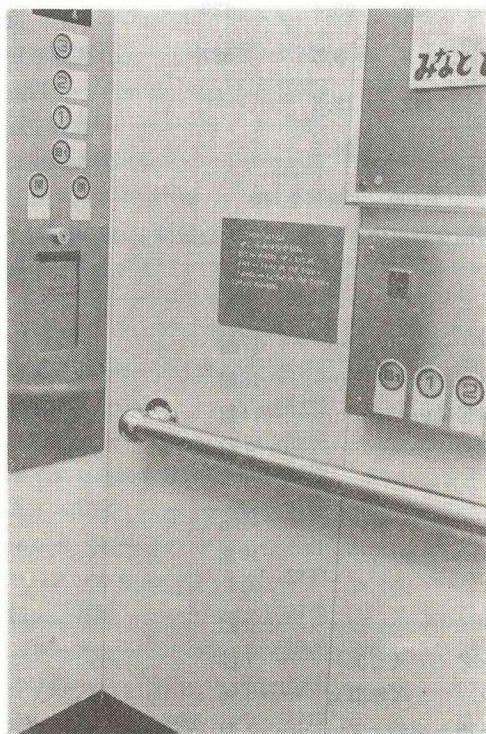
録音風景（都立中央図書館）



点字案内（港区立みなと図書館）



車椅子用エレベーター内部低位置にある階数表示ボタン（港区立みなと図書館）



障害者サービス全国実態調査 図書館問題研究会編『障害者と図書館』（参考文献
I-2, p. 116~118より）

- ・調査対象……294館（図問研の会員がいる公共図書館。調査用紙は会員あて発送）
- ・調査時期……1980年4月末
- ・回収……94館（うち都県立図書館，8都県13館）
- ・回収率……32.0%

問一 省略

問二 あなたの図書館を何らかの形で利用している身体障害者数を，分かる範囲で記入して下さい。

障 害 名	館 数	率 (%)	実数(人)
視 覚 障 害 者	46	48.9	1,168
聴 覚 障 害 者	22	29.4	73
車イス使用者	47	50.0	119
在 宅 者	22	23.4	120
入 院 中	8	8.5	※587
そ の 他	12	12.8	
利 用 者 な し	23	24.5	

※大森南207，日野100，古川市立140

問三 障害者が図書館を利用するために，どんな設備上の配慮が行なわれていますか。

(1)来館経路

- スロープ……………17館
- 点字ブロック……………18館
- 盲人用信号機……………14館
- 交通機関点字……………9館

(2)サービス内容

- ①対面朗読……………15館
 - ・持込可……………10館
 - ・朗読者
 - 職員……………2館
 - ボランティア（有償）……………7館
 - 〃（無償）……………4館
 - 職員＋ボランティア……………1館（都県立は全て有償ボランティア）

・場所

図書館以外の場所も	3 館
利用者宅	1 館

・部屋

対面朗読室	9 館
その他——集会室, 閲覧室, 視聴覚資料室	

・時間

2 時間	10 館
------	------

・時間帯

ほとんどが開館時間中(都立江東 火, 木, 金12~17時)

・申込み

当日	2 館
前日	1 館
2 日前	3 館
1 週間前	3 館

②提供資料

録音図書	23 館
市販テープ	14 館
点字図書	13 館
図書郵送貸出し	11 館
配達サービス	6 館

(3)敷地内

点字ブロック	22 館
スロープ	37 館

(4)館内

障害者用トイレ	44 館
自動ドア	39 館
天眼鏡	36 館
車イスで通れる書架間隔	33 館
車イス配置	31 館
エレベーター	30 館
テープレコーダー	27 館
拡大読書器	27 館
スロープ	19 館
点字器	18 館
低いカウンター	15 館

低い電話器	10館
車イス用机	8館
レーズライター	7館
誘導チャイム	7館
点字設定表示	5館
車イスごと職員が持上げる	5館
バス停・駅まで送迎	4館
大きな字の施設表示	4館
点字誘導路	4館
点字館内板	3館
巡回バス・車	1館

問四 障害者サービスの内容

(1)資料

点字図書	21館
録音テープ	20館
市販テープ	18館
録音・市販テープ両方	26館
大活字本	9館
さわる絵本	8館
拡大写本	6館
墨字図書	4館

(2)資料案内

(3)資料の相互貸借

- ・相手……点字図書館，自治体内図書館，都県立図書館
- ・資料……録音図書，点字図書中心

問五 障害者サービスに対応する図書館側の体制についてお書き下さい。

担当者がいる	48館
点字のできる人がいる	23館
手話のできる人がいる	6館
障害者の職員がいる	7館

問六 ボランティア

- ・ボランティアのいる館
- ・有償
- ・報償費……1時間600～900円 90分テープ1本1,000円
- ・無償

3) 外国の現状

今回は時間がなく、外国の進んだ状況についての分析は、行えなかった。しかし、東京大学総合図書館で昭和52年視覚障害学生（全盲）を受入れた時に、「身体障害者問題検討小委員会」の一員として身障者サービスについての問題に関わって以来、ずっとこの問題と積極的に取り組んでいる東京大学総合図書館の河村宏氏が、諸方面に現状の紹介をなさっているので、ご本人の了解を得てここに引用させていただく。

(1) オックスフォードとリーズ

ライプツィヒの IFLA 総会に出席した後、私は、4人の視覚障害者を含む5人の総会出席者とともに、「英国型」の障害者への図書館サービスを学ぶために、英国のいくつかの図書館と大学を訪問した。

オックスフォード大学の中央図書館である「ニュー・ボードレアン」の入口に近い1階128号室の扉には、“Blind Students Reading Room”という真鍮のプレートが光っていた。中は通路をはさんだ4室の小部屋に分割され、同時に4人の利用者があっても互いの音声に邪魔されぬよう防音されていた。

扉の内側には、この読書室の設備が1973年5月に、当時学生だったスナイダー氏の呼びかけに応えた学内の人々の拠金によって設けられたことが、点字と墨字の両方で示されていた。

スナイダー氏は、全盲の米国からの留学生だったが、全盲の学生の受入れに百年以上もの歴史を持つオックスフォード大学に、満足な読書室がないことを憤り、中央図書館への読書室の設置の必要性を学内に広く訴え、図書館長と交渉して読書室の設置に成功している。現在この読書室には教授と学外者を含む12名が利用の登録をしているという。

リーズ大学で私達は、全盲の哲学者ミリガン教授に会った。彼は ABAPSTAS (Association of Blind and Partially Sighted Teachers and Students) の創立者の1人であり現議長である。3人の全盲教員と数人の視覚障害の学生がいるリーズ大学の中央図書館には、やはり防音された二つの読書室が盲人用に設けられており、点字図書も用意されていた。

ミリガン教授は、「学生が朗読者の手配を自分自身でできるように指導し、環境を整えることが図書館の役割だ。何故なら、彼らは卒業すれば独力で朗読者を組織しなければならないだろうから」と言い切った。ABAPSTAS は設立後10年の間に、盲学生が朗読者を雇用するための奨学金を4倍に増額させていた。

過去数十年間、視覚障害を理由に入学を拒否した例はないとしながらも、一留学生の訴えを認めて最良の位置に盲人用読書室を設けたオックスフォード大学図書館と、障害者への門戸開放を改めて宣言し、図書館長も障害者受入れのための委員会

の一員となっているリーズ大学のあり方は、障害者への図書館サービスにおける重要な問題を示しているように思われる。

システムや予算と同等以上に重要なものは、障害者自身による要求の提示と、それを自然に受けとめる図書館の側の柔軟な態度ではないだろうか。

(参考文献Ⅳ-85)

(2) Print-Handicapped へのサービスネットワーク

米国の図書館の障害者サービスの最も進んだ面は、“Print-Handicapped” へのサービスに見ることができます。“Print-Handicapped” とは「普通の印刷物を読むことができない身体障害者」を指していて、全米で 300 万人がそれに該当するとされています。米国議会図書館の NLS/BPH (National Library Service for the Blind & Physically Handicapped: 盲人と身体障害者のための全国図書館サービス) は、この 300 万人を対象にした全国 160 館のネットワークを統轄しています。実際に NLS/BPH のネットワークの資料を利用している人は 72 万人だと聞きましたが、年間経費約 100 億円、年間貸出総数約 1,500 万点という数の大きさは、私達を圧倒しました。

NLS/BPH は、現在 3 万タイトルの蔵書を持ち、新刊書を中心に年間 2 千タイトル以上を計画的に作製していますが、個々の利用者のリクエストに応ずるというサービスはやっていません。

しかし、NLS/BPH にはボランティア活動を援助し組織するという活動もあって、全米の 245 のボランティアグループを網羅した利用案内である “Volunteers who produce books” を編集しています。この利用案内には、点字版と大活字版があって、各地のボランティアグループの所在地とサービス内容が記載されています。サービス内容は、巻末にある詳細な索引を使って調べることができます。例えば数字の点訳をやるグループが 85 団体、日本語文献をこなすグループが 4 団体という具合です。

NLS/BPH は、こういうボランティアグループを援助するために、点訳者の養成と資格試験を実施し、一定の水準を保証された点訳および録音資料を NLS/BPH の総合目録に記載し、著作権処理を代行するという活動を行っています。

全国の第一線の図書館は、NLS/BPH のこういう幅広いバックアップに支えられて “Print-Handicapped” へのサービスを展開しています。

(3) 大学図書館と RFB

大学図書館に目を転ずると、NLS/BPH の他に、RFB (Recording for the Blind) と APH (American Printing House) のサービスが強力なバックアップとなっていました。

私達はニューヨーク州立大学で全盲の社会学者である H. C. Selvin 教授のお話を聞くことができました。彼は、“Serving physically disabled people; an information handbook for all libraries”〔東大図書館学資料室請求番号：015/82〕という障害者サービスを詳述した図書の、公共図書館での盲人サービスの部分を執筆しています。彼の研究と教育に必要な文献は、大学図書館、秘書、6人のボランティア、学生アルバイト、そして RFB によって提供されるとのことでした。

RFB のマスターテープライブラリーには、大学生と研究者のための専門図書が5万タイトル所蔵されています。申込があるとマスターテープからカセットテープに複製して発送されますが、マスターテープライブラリーにまだ所蔵されていない図書は、原本を2冊送れば録音してもらえます。マスターテープライブラリーの資料は世界中どこからでも利用することができます。東大から依頼した資料の中で、早いものは、依頼書発送後3週間でカセットテープが届いています。マスターテープライブラリーの蔵書は、年間4,000タイトル増加しているそうです。

東大附属図書館の「指定図書目録55年度版」に収録されている約1,000冊の指定図書の中に、英文資料が約140冊含まれていますが、その約1/3がマスターテープライブラリーの目録にも収録されていました。東大の指定図書だけをとって見ても、録音時間で3,000時間を超える量の録音資料が RFB に既に用意されているのです。

RFB と NLS/BPH のカセットテープは、4トラック、毎秒2.4cm という特殊な規格で録音されていて、普通のカセットの4倍の量が録音できます。しかし、それを再生するためには特殊なテープレコーダーが必要です。APH は、この規格に合うテープレコーダーを医師等が“Print-Handicapped”である旨を証明した人だけに販売しています。NLS/BPH が利用者に無料で貸出す再生専用のカセットプレーヤーもこの規格です。(参考文献Ⅳ-45)

(4) 大学図書館におけるハンディキャップサービスについて

すでに米国では、議会図書館の DBPH(Division for the Blind and Physically Handicapped) が中心になって全国的なハンディキャップサービスの充実がはかられてきた上に、昨年「リハビリテーション法第504条」の施行規則が施行され、一層徹底した「障害者非差別」が、教育機関を含む公共機関に義務づけられた。これによると、大学においては「障害の故に、入学を拒否され、入学および募集で差別されてはならない(42条)」ほか、「テープ録音した教科書、手話通訳または口述教材を聴力損傷学生が利用できるようにする有効な方法、視覚損傷学生のため図書館での朗読者、肢体の損傷学生の利用に合わせた教室設備(44条)」等の整備が義務づけられている。また、この「障害者非差別」は障害の故に雇用上の差別をすることも禁じているため、米国の図書館界は改めてハンディキャップサービスの一層の充実と、障害を持つ職員の雇用の具体化という問題に直面している。

このように、障害者の権利については日本よりもはるかに進んだ米国における例ではあるが、オハイオ州立のライト州立大学の図書館が、次のような原則を早くから掲げて包括的なハンディキャップサービスをめざして実践を展開していることは、大学図書館がこの困難な事業にとりくむ必然性を雄弁に物語っている。

1. すべての学生、教職員が大学図書館を利用できるべきである。
2. 利用者に利用可能な（形態の）資料を提供する責任は図書館にある。
3. 点字化又は録音テープ化された資料を、図書館利用者は必要に応じて利用できるべきである。
4. これら資料の作成に要する費用は、大学図書館が負担しなければならない。

（参考文献Ⅳ-52）

他に『図書館と国際障害者年』（参考文献Ⅰ-3）、「米国図書館界の障害者サービスを訪ねて」（参考文献Ⅳ-10）などがある。

また、DIALOG 検索の結果、多数の文献がみられた。その一部は下記のとおりである。

1. Thiele, Paul L. "Libraries, blind people, and the IYDP."
Journal of visual impairment and blindness, v 76 n 1 (1982)
2. Ferrandiz, Susan. "Modest beginnings to service for disabled persons."
Canadian library journal, v 38 n 5 (1981)
3. Ensley, Robert p. "State library agencies and the provision of library services for blind and physically handicapped persons."
Catholic library world, v 52 n 4 (1980)
4. Tesler, Patricia. "Enabling librarians to serve the disabled."
American libraries, v 11 n 4 (1980)
5. Hagle, Alfred D. "Information access by blind and physically handicapped persons."
Advances in librarianship, v 12 (1982)

〔7〕 新図書館に必要な機能

1) 施設

現在日本では身障者が使えるための建築の施設・設備の構造基準は立法化されていないということであるが、7、8年前から建てられた新しい図書館は、どこも入口のスロープ、エレベーターまたは2階までのスロープ、身障者用トイレは、最低備えているようになった。新図書館では、これらはもちろんのこと出来る限り安全面での配慮が必要である。身障者だけでなく、一般の利用者にとっても危険のない

障害物がなく滑りすぎない床、ゆったりしたスペース等、設計者、館員、利用者（年齢別に）がよく話し合っただけでなければならない。

町田市や港区では町全体を使い易く安全に作ろうと指導されているが、身障者にとって使い易い施設、出かけ易い場所は、他の健常者達にとっても同様である。他の施設を見てきた結果、必要と思われるものをまとめてみると次のようになる。

- (1) 駐車場：現在在籍の車椅子利用の学生も車で通学している。
- (2) 入口のスロープ
- (3) 入口の自動ドア
- (4) エレベーター：一基は車椅子用に設計されたものが必要。普通のエレベーターでは行先ボタンに手が届かなかったり出入りに危険である。
- (5) 車椅子用トイレ：現在利用者のいない慶応義塾大学三田情報センターでは学生が更衣室の代わりに使用しているということだが、使用されない時には他の目的にも使われてよい。
- (6) 録音室：対面朗読ができ、点字タイプライターの使用音が外にもれない程度の防音が必要。
2～3室、他の目的にも使用できる小部屋とする。

参考文献

日本図書館協会『図書館建築関係文献目録1965～1980』1981（ト9・3215）

（この文献目録に収録されている参考文献は省略）

D. ポレット P. C. ハスキル 編木原祐輔・大橋紀子訳『図書館のサイン計画——理論と実際——』木原正三堂 1981（ト9・3234）

日本建築学会編『建築設計資料集成、7 建築文化』丸善 1981（ム7・5002・7）

『心身の障害と新しい施設計画』ソフトサイエンス社 1976

建設省・建築士会連合会編『身体障害者のための建築設計標準報告書(1982)』

2) 設備

- (1) 出入口の外に来館を知らすことのできるインターホン等：受付から来館者が見えない場合や介助がいる場合に必要。ある新図書館では二重扉が両方とも自動ではない重いもので外にインターホンやブザーもなく、車椅子や松葉杖を使用している時には入れない。
- (2) カウンター：なるべく高さの低いものを使用、車椅子用の特別カウンターを設けるのではなく一般の利用者も係員と楽に対面できる高さがよい。
- (3) 電話：車椅子で利用可の高さのプッシュホン。
シルバーホンも併用できれば1台でよい。
- (4) 弱視者用拡大器

ノルウェイ生まれの世界的なアームライト

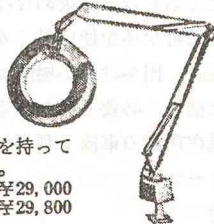
弱視者用拡大器 (ラクソーアームライト)

スムーズな動き、バランスのよさ、正確さ、堅牢さと機能的なデザインで、広く愛用されている優秀品です。特に LFM 型は照明+レンズの効用を持っていますので弱視者用として最適です。

LFM-3D 2 段式アームレンズ付 1.75 倍 要 29,000
LFM-5D 2 段式アームレンズ付 2.25 倍 要 29,800

(各) アームの長さ 1150 mm アイボリー

LFM 型にレンズアタッチメントを付けますと 高倍率までクローズアップされます。



丸善

日本建築学会編『建築設計資料
集成10 技術』丸善 1983
(ム7・5002・10) より

障害の種類・程度とサイン

肢体障害者：車いす使用者は座位状態で移動するため、サイン設置高・角度に留意する。

視覚障害者：全盲者に対しては足裏・手指の感触や音によるサインが、弱視者に対しては文字を大きくかつ明度対比を明快にするサインが必要である。色盲・弱視者は色によっては見分けがつかない場合がある。

聴覚障害者：視覚・光・振動などによるサインが必要である。

障害者をスムーズに誘導するためにはサインだけでなく人的介助・インフォメーションパンフレットなどの総合的整備が重要である。火災などの非常時への対応も十分考慮する。

身体障害者のための国際シンボルマーク①

障害者が容易に利用できる建物・施設であることを明確に示すマークで、国際障害者リハビリテーション協会により制定されている。

マークの作成・使用制限に関しては各国の責任に任されているが、下記のようない見解が示されている。

- (1) マークのデザイン・比率：国による。
- (2) 色：コントラストの強いものとし、ブルーか、黒の地に白のマークまたはその逆とする。
- (3) 寸法：マークは10cm角以上45cm角以下が望ましい。

また、国際シンボルマークを掲示するための最条条件は下記の通りである。

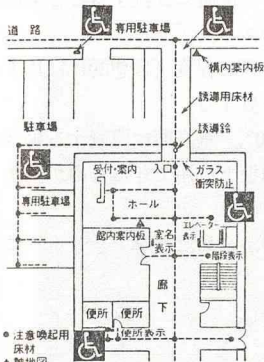
玄 関：地面と同高とするか、階段の代わりまたは階段のほかにランプ（傾斜

路)を設置。

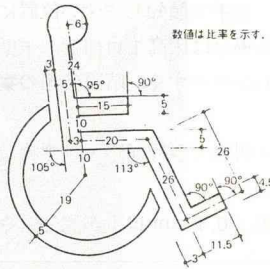
出入口：80cm以上開くもの、ただし回転ドアの場合は別の入口を併設。

ランプ：傾斜は1/12（こう配4.5°強）以下かつ室内外を問わず、階段の代わりにまたは階段のほかにもランプを設置。

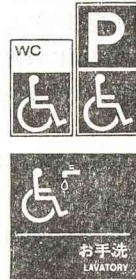
サイン 身体障害者



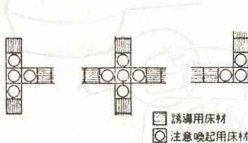
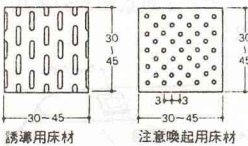
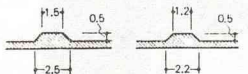
サイン配置の考え方



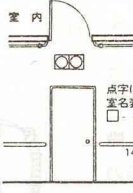
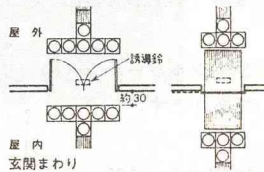
身体障害者のための国際シンボルマーク
作図法 [1]



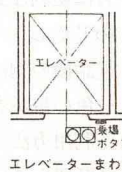
使用例



床材配置例
身体障害者用床材 [2]



室出入口まわり 階段まわり
部位別視覚障害者用サインの考え方 [3]



通路・廊下：130cm以上の幅。

トイレ：利用しやすい場所にあり、外開きドアで仕切り内部が広く、手すりがあったもの。

エレベーター：入口幅は80cm以上。

足裏の感触によるサイン②

一般に線状床材と点状床材に大別される。線状床材は誘導用として使用される。点状床材は注意喚起用として、誘導途中の一時停止・方向転換・段差箇所・境界表示などを示す場合に使用されることが多い。敷設幅は40cm以上とする。

手指の感触によるサイン③

点字案内板は一般に触地図が多い。わかりやすい位置に設置するとともに、そこまでの誘導サインを充実化することが肝要である。

触地図の場合、外形寸法は両手で一度に触知できる程度（理想的には片手の動作範囲内）とし、左手で触知しやすい位置に設置する。

水平面に設置する場合は床高1m前後、角度30°、垂直面に設置する場合は床高1.2m前後がわかりやすく、晴眼者用の案内板と併用できるものが望ましい。

表示内容は単純・明快で歩行経路・目標物などが容易に理解できるようにする。

表示面の凹凸の差は0.4mm以上が認知しやすい。

（公衆シルバーホン）めいりょう 普通の電話の声では、聞きとりにくい方に便利な公衆電話（卓上形青電話・卓上形黄電話）です。

●めじるし

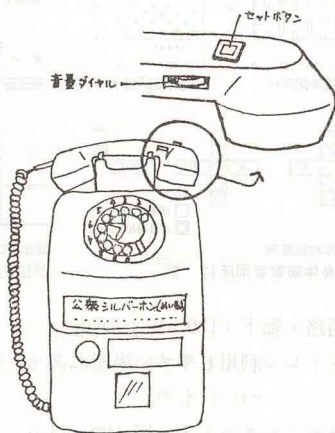
電話機の胴に「公衆シルバーホン（めいりょう）」の表示をした、シルバー色の帯が巻いてあります。

『テレホンガイド東京昭和57年10月』p292より

●ご利用方法

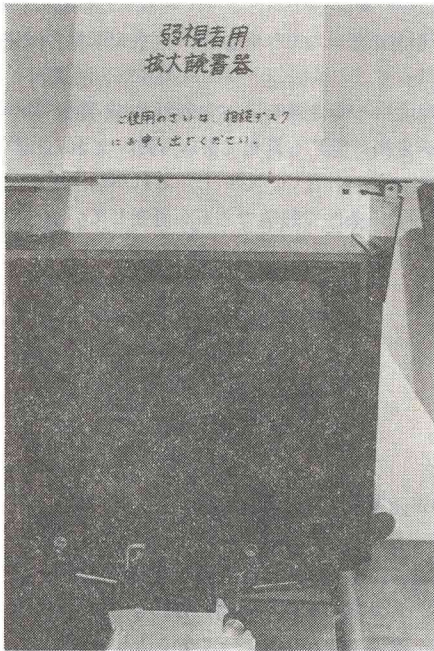
受話器をあげ、10円または100円硬貨を入れてから

1. 受話器のシルバー色のセットボタンを、1回押してください。
2. 受話器の音量ダイヤル（4段階調節可能）を操作し、相手の声を聴力に合わせて調整してください。
3. 通話終了後、音量ダイヤルは元の位置まで戻してください。



(5) 弱視者用拡大読書器（白黒、カラー）

辞典等を引きながら本を読む時のために最低2台必要
地図等を見る時はカラー映像が便利



(株)ミカミ製

白黒 80万円

カラー 250万円

都立中央図書館
使用のもの

(6) 点字タイプライター (2万円から)

(7) テープレコーダー 数台

(8) 館内用車椅子 (1台 6万6千円から)

(9) その他

視覚障害者対策の進んでいる英米では下記のような優れた機能を持つ機械も作られている。

① オプタコン (131万円から)

OPTACON (OPTical to TActile CONverter) は超小型のカメラが写し出す文字の影像を144個の針の運動に変換し、指先で触読する装置。50時間程度のトレーニングが必要だが、普通文字に近い形で写し出すので、中途失明者に有効とも言われる。(参考文献I-41)

② カーズワイル読書機 (3万ドル以上) (米国ゼロックス社製)

英語の印刷文字(タイプ印字も)を音声として読み上げる。アメリカでは、400

～500台、使われており、ゼロックス社が大学に寄贈もしている。日本では日本ゼロックス社が見本として2台、所有しているのみ。(現在、通産省で日本語を開発中)

③Brailink

英国製、点字ディスプレイを有するコンピューター(東京大学総合図書館にて昭和59年3月購入)

他に日本点字図書館では点字のワープロともいべき教材作成装置 Brail Master (ナショナル製 点字, カナ変換可能)も見せてもらった。これらは、大変高価であるし、すぐに必要なものとは思われない。しかし、これから、どのように使えば障害を持つ学生が、少しでもよい条件で勉強できるか研究していかなければならない。

3) サービス

- (1) オリエンテーション
- (2) 利用者との話し合い
- (3) 職員研修
- (4) レファレンス・サービス
- (5) 来館して本を借り出すのが困難な人への郵送貸出
- (6) その他: 録音・対面朗読・点訳 etc.

どのように良い施設、設備を備えても館員が障害を持つ利用者に対して理解がなければ、利用し易くはならない。各学部の事務所に問い合わせたことだが、ごく少数の担当者以外は学部に、身障学生がいることを知らない場合が多い。新入生受入れの際にどのようなことに障害があり、どのようなサービスが可能かを検討する身障者受入委員会のようなものを作り、そこから他の職員へ伝達するシステムが必要である。

新しく入る身障学生に対して、今までオリエンテーションを全く行っていないが、これは昭和59年度からでも実施が望まれる。図書館の利用法を知らせ、館員が不備な点は手助けできることだけでも伝えておけば利用し易くなるに違いない。

法学部では何年か前に2名の視覚障害の学生を受け入れた時に、全国的水準からみても相当に質の高い対応策を講じているが、残念ながら図書館では国会図書館の録音サービスの窓口を開いただけである。昭和59年度にも法学部では視覚障害の新入生を迎える予定である。この機会に図書館でも身障学生のいる学部とも連絡をとって対応していくことが望まれる。

他に対面朗読サービスを館員がするのか、ボランティアがするのか、ボランティアは有償か無償かといったことや、手話や点字が必要な時にはどうするか、といったことなども利用者との話し合いの中で何がどうできるかを検討しながら、可能な

ことから実現していかなければならない。

おわりに

以上短い期間に身障者サービスについてゼロから出発し、資料等も十分に読みこなさないうちに書かれた報告書なので、不備な点が多いのですが、国際障害者年の始まりも図書館とは無関係の如くに迎えてしまった図書館員としては反省をこめて最初の一步を踏み出しました。この報告書が単なる報告書として終わることなく、更に前進するための礎となるよう祈ってやみません。(1984年3月26日)

身障者サービスワーキング・グループ

小野田照子(逐次刊行物係)

長岡三智子(特別資料係)

三浦 育子(参考係)

柳井 友子(第一閲覧係)

上野 俊男(第一閲覧係)

I 本館所蔵身障者サービス関係参考文献(図書編)

分類番号欄の空欄は現在整理中の図書

	書名	著者名	出版者	出版年	ページ	分類番号
1	障害者と図書館	国立国会図書館内J L A・T L A 役員懇談会研究班編	J L A・T L A 国立国会図書館グループ	1974	12p	ト8・1775
2	障害者と図書館	図書館問題研究会編	ぶどう社	1981	270p	ト9・3195
3	図書館と国際障害者年——情報へのアクセスの平等を求めて	河村宏編	日本図書館協会	1982	175,129p	ト9・3225 (参考室)
4	としょかんサービスこれからの課題——障害者と読書権——	日本図書館協会障害者サービス委員会編	〃	1984	345p	ト9・3362 (〃)
5	東京大学総合図書館における「ハンディキャップサービス」の構想(答申)	東京大学総合図書館身体障害者問題検討小委員会	東京大学総合図書館	1978	44p	
6	ボランティアを世界に訪ねて——点訳奉仕を中心とした点字図書館の実態——(日点文庫No. 15)	小林康子	日本点字図書館	1976	147p	ト8・1783・15
7	指と手で読む——日本点字図書館と私——(岩波新書黄版138)	本間一夫	岩波書店	1980	213p	ト9・3155
8	図書館サービスの拡大を求めて——イギリス公立図書館とアウトリーチ・サービス	イギリス教育科学省 川崎良孝〔ほか〕監訳	図書館問題研究会 愛知支部	1983	p.31-43	
9	日本図書館学講座4 公共図書館	森耕一	雄山閣	1976	p.129-135	ト9・2966・4 (参考室)
10	講座 新図書館学1 図書館通論	図書館科学会編	教育出版センター	1977	p.190-228	ト9・2979・1 (〃)
11	〃 6 図書館活動	〃	〃	1976	p.334-336	ト9・2979・6 (〃)

12	図書館学教育資料集成3 図書館活動論	塩味昇編	白石書店	1978	p.100-112	ト9・3034・3 (参考室)
13	図書館活動 (図書館学テキストシリーズ10)	前島重方	理想社	1983	p.136, 167-181	ト9・3285 (//)
14	現代図書館学講座6 図書館活動	桒上衛 [ほか]	東京書籍	//	p.134-169	ト9・3351・6 (//)
15	図書館ハンドブック 第4版	日本図書館協会 図書館ハンドブック編集委員会編	日本図書館協会	1977	p.334-336	ト9・3016 (//)
16	国立国会図書館の課題	磯村英一・松浦総三編	白石書店	1979	p.124-128	ト9・3101 (//)
17	図説 図書館のすべて (ほるぶ叢書4)	図書館問題研究会「図説図書館のすべて」編集委員会編	ほるぶ総連合	1980	p.60-69	ト9・3146 (//)
18	「図書館員の倫理綱領」解説	図書館員の問題調査研究委員会編	日本図書館協会	1981	86p	ト9・3200 (//)
19	図書館用語事典	図書館問題研究会 図書館用語委員会	角川書店	1982	p.1, 250-251 287-288 482-484	ト9・3253 (//)
20	障害者福祉の焦点	吉本充賜	ミネルヴァ書房	1984	p.109-115	ヲ3・5997
21	みんなに本を 図書館白書1972	日本図書館協会編	日本図書館協会	1972	p.38-39	ト9・2869・1
22	図書館白書1980 図書館法30年記念——戦後公共図書館の歩み	//	//	1980	p.33-35	ト9・2869・4 (参考室)
23	日本の公共図書館1974 地域に根ざした図書館の創造を	第21回図書館問題研究会全国大会 記録編集委員会編	図書館問題研究会	1974	p.65-68	ト9・3124・2
24	日本の公共図書館1975 地域・自治体に図書館の役割の確立を	第22回 //	//	1975	p.16-17, 105 109-112, 140-141	ト9・3124・3
25	日本の公共図書館1976 地域と生活に根ざす図書館の追求を	第23回 //	//	1976	p.101-102, 112-113	ト9・3124・4

	書名	著者名	出版者	出版年	ページ	分類番号
26	日本の公共図書館1977 みんなの図書館 臨時増刊 第24回大会記録	図書館問題研究会編	図書館問題研究会	1977	p.115-117	ト9・3124・5
27	昭和49年度 全国図書館大会記録 東京都	昭和49年度全国図書館大会運営委員会事務局	同 左	1975	p.12-15	ト9・2811・6
28	昭和50年度 " 島根県	昭和50年度全国図書館大会実行委員会事務局編	"	1976	p.85-88	ト9・2811・7(1)
29	" " "	"	"	1975	p.65	ト9・2811・7(2)
30	昭和51年度 " 東京都	昭和51年度全国図書館大会実行委員会編	日本図書館協会	1977	p.50-58	ト9・2811・8
31	昭和52年度 " 近畿	全国図書館大会実行委員会編	"	1978	p.43-52	ト9・2811・9
32	昭和53年度 " 北日本	昭和53年度全国図書館大会実行委員会編	"	1979	p.84-101	ト9・2811・10
33	昭和54年度 " 東京	昭和54年度 "	"	1980	p.94-101	ト9・2811・11
34	昭和55年度 " 鹿児島	昭和55年度 "	"	1981	p.68-78	ト9・2811・12
35	昭和56年度 " 埼玉	昭和56年度 "	"	1982	p.41-53	ト9・2811・13
36	昭和57年度 " 福井	昭和57年度 "	"	1983	p.111-127	ト9・2811・14
37	昭和58年度 " 山口	昭和58年度 "	"	1984	p.134-155	ト9・2811・15 (参考室)
38	図書館年鑑1982	日本図書館協会 図書館年鑑編集委員会編	日本図書館協会	1982	p.402, 609-628	ト9・3231・1
39	" 1983	"	"	1983	p.233-236	ト9・3231・2
40	" 1984	"	"	1984	p.227-231	ト9・3231・3 (参考室)

41	指さきの目 オプタコン	松井新二郎編	日本盲人職能開発センター	1978	52p	
42	ボランティアの手びき I 視覚障害者とともに	新谷弘子編著	ドメス出版	1981	195p	ワ3・6075・1
43	点字図書館ハンドブック	日本盲人社会福祉施設協議会点字図書館ハンドブック編集委員会編	日本盲人社会福祉施設協議会	1982	537p	ト9・3307
44	点字と朗読への招待	本間一夫〔ほか〕編	福村出版	1983	227, 7p	ト8・1771
45	点字読書と普通読書——研究と指導法——	草島時介	秀英出版	〃	267p	ト8・1747
46	録音図書制作の実際——朗読ボランティアのために——	古澤敏雄	日本点字図書館	1984	83p	ト9・3363
47	レコーディングマニュアル	日本盲人社会福祉施設協議会録音に関する委員会編	日本盲人社会福祉施設協議会	〃	209p	ト9・3371
48	著作権へのしるべ——著作権と図書館——	米川猛郎	日本図書館協会	1976	177,55p	ワ16・5680
49	改訂 著作権法逐条講義	加戸守行	著作権資料協会	1974	p.168-171	ワ16・5701
50	著作権のノウハウ (ビジネス法務シリーズ)	半田正夫・紋谷暢男編	有斐閣	1982	p.213-216	ワ16・5768
51	著作権とその周辺 (日評選書)	阿部浩二	日本評論社	1983	p.115-120	ワ16・5790
52	〔国立国会図書館所蔵〕録音図書目録昭和54年4月30日現在	国立国会図書館学術文献録音事務局編	同 左	1979	44p (追録有)	イ2・4059・1
53	〃 点字版 〃	〃	〃	〃	〃	イ2・4059・2
54	ぶっくがいど	川崎市盲人図書館編	川崎市盲人図書館	1982 1983	4 冊	
55	点字図書・録音図書 全国総合目録 (I) No. 1	国立国会図書館参考書誌部編	国立国会図書館	1982	235p	イ2・4415・1 (参考室)
56	〃 〃 1981	〃	〃	〃	239p	イ2・4415・2 (〃)
57	(II) No. 2 〃 1982	〃	〃	〃	251p	イ2・4415・3 (〃)
	(III) No. 3					

	書名	著者名	出版者	出版年	ページ	分類番号
58	東京都公立図書館録音図書総合目録 1984	東京都公立図書館・図書館利用に障害のある人々へのサービス研究会編	同 左	1984	116p	
59	視覚障害関係図書・資料目録	日本点字図書館資料室編	〃	1981	89p	ト8・1766・1
60	〃 (追録1)	〃	〃	1983	123p	ト8・1766・2
61	臨時増刊 IYDP 情報 第2回障害者関係図書フェア出展図書目録	国際障害者年日本推進協議会編	〃	〃	49p	

Ⅱ 本館所蔵身障者の大学進学関係参考文献（図書編）

分類番号欄の空欄は現在整理中の図書

	書名	著者名	出版者	出版年	ページ	分類番号
1	視覚障害者が社大で学んで——25番教室の4年間	酒井栄蔵〔ほか〕編	日本社会事業大学	1977	59p	ト5・2709
2	123ページの伝言——1978年春、早稲田大学法学部に学んだ一視覚障害者の記録	指田忠治編	同 左	1978	123p	ト8・1694
3	フェニックスとともに——ある視覚障害者の大学生活	「広島大学における平重忠君の生活」を記録する会編	〃	〃	84p	ト5・2708
4	“明日への大学”，その一つの歩み——ICUにおける一盲学生の在学の記録——	草山こづえさんの ICU 在学の記録をつくる会編	〃	1981	93p	ト5・2707
5	しじみ貝の詩 聴力障害者の体験から	岩渕紀雄	日本放送出版協会	1978	230p	ヲ3・6077
6	お酒はストローでラブレターは鼻で	松兼功	朝日新聞社	1983	214p	
7	ビレネーを越えて 典子とコーラルのスペイン留学	赤澤典子	東洋経済新報社	1984	213p	ト5・2716
8	福祉・障害者・大学	小川太郎〔ほか〕編	ミネルヴァ書房	1975	237p	
9	講座 日本の学力14 青年の学力	宮川知彰〔ほか〕	日本標準	1979	p.287-309	ト2・3123・14

10	盲聾教育八十年史	文部省	日本図書センター	1981	p.189-194	ト8・1745
11	講座 障害者の福祉 3 障害者の教育と心理	三沢義一	光生館	1984	p.211-226	ヲ3・6023・3
12	障害者福祉の焦点	吉本充賜	ミネルヴァ書房	//	p.49-62	ヲ3・5997
13	大学進学の手引	日本盲人福祉研究会 大学 進学・就職対策委員会編	日本盲人福祉研究 会	1978	38p (追録有)	
14	大学進学の手引き	財団法人 いしずえ	同 左	1978	51p	
15	オープンユニヴァーシティー	ウォルター・ペリー 西本三十二訳監修	創元社	1979	p194-201	ト5・2499
16	日本の大学——その現状と改革への提言——	大学問題検討委員会編	勁草書房	//	p38-45	ト5・2500
17	開かれた大学へ——大学の開放及び大学教育 改革の進展——	斎藤藤淳編著	ぎょうせい	1982	p.143-148	ト5・2611
18	和光学園五十年	和光学園五十年史編纂委員 会編	和光学園	1983	p.505-509	ト5・2695
19	ろう教育——君ら音をうばわれて——	伊東雋祐	部落問題研究所出 版部	1967	p.80-85	ト8・1671
20	障害児教育とその周辺	井原栄二	湘南出版社	1982	p.187-189	ト8・1727
21	この子らと生きて 障害児を育てた親の記録 〈新日本新書257〉	岡田道智・鴨井慶雄	新日本出版社	1983	p.151-156	ヲ3・6076
22	障害児教育概論	田中美郷〔ほか〕編著	川島書店	1984	p.201-203 204-205	ト8・1765

III 本館所蔵その他の身障者関係参考文献（図書編）

分類番号欄の空欄は現在整理中の図書

	書 名	著 者 名	出 版 者	出版年	ページ	分類番号
1	国際障害者年	八木英二	青木書店	1980	218p	ヲ3・5426
2	障害者と完全参加	日本社会福祉対策研究会編	同 左	1981	304p	ヲ3・5745

	書名	著者名	出版者	出版年	ページ	分類番号
3	昭和56年度版厚生白書 国際障害者年——「完全参加平等」をめざして——	厚生省編	大蔵省印刷局	1981	p.3-66, 445-466	≡9・4938・25
4	梅根悟障害者教育論集	障害者の教育権を実現する 会編	現代ジャーナリズム ム出版会	〃	226p	ト8・1740
5	完全参加と平等をめざして——国際障害者年 のあゆみ——	国際障害者年日本推進協議 会編	日本障害者リハビリ テーション協会	1982	735p	ヲ3・5871
6	盲と目あき社会	藤田真一	朝日新聞社	〃	420p	ヲ3・6035
7	現代の障害者福祉問題	一番ヶ瀬康子	ドメス出版	〃	197p	ヲ3・5682
8	点字	鎌田元芳	KMT式点訳技法 の普及と奉仕の会	1980	138p	ト8・1710
9	標準点字表記辞典	『標準点字表記辞典』編集 委員会編	日本盲人福祉研究 会	1982	225p	ト8・1773 (参考室)
10	手話への招待	中野善達〔ほか〕編	福村出版	1977	189p	ト8・1693
11	手話の考察	中野善達編	〃	1981	219p	ホ1・2384
12	手話を学ぼう 短文編	中野善達・伊東雋祐	〃	1979	220,7p	ト8・1706
13	〃 生活編	〃	〃	1982	216,9p	ト8・1772・1
14	〃 社会編	〃	〃	〃	204,9p	ト8・1772・2
15	日本手話辞典	金田富美	光書房	1980	318p	ト8・1715 (参考室)
16	目と手と声と	日本盲人福祉研究会	同 左	1978	327p	ヲ3・6014
17	みんなボランティア 障害者とともに	野上良彦編	福村出版	1983	208,7p	ヲ3・6015
18	手話サークルの本	早稲田大学手話サークル編	同 左	1984	106p	ト8・1785
19	世界盲人百科事典	世界盲人百科事典編集委員 会編	日本ライトハウス	1972	1006p	ヲ3・4968 (参考室)
20	車いすTOKYOガイド	車いすTOKYOガイド作成 委員会編	同 左	1975	163p	ヲ3・6079

21	S S K 新宿車いすガイド	新宿身障明るい街づくりの 会編	身体障害者団体定 期刊行物協会	1980	156p	ヲ3・6107
22	三重苦の聖女ヘレン・ケラー傳	山室武甫	東海出版社	1948	76p	ヌ10・4889
23	ヘレン・ケラー自叙傳	岩橋武夫訳	千代田書房	〃	523p	ヌ10・4890
24	盲目の詩人エロシェンコ (一時間文庫)	高杉一郎	新潮社	1956	236p	ヘ22・7625
25	エロシェンコ全集 1	高杉一郎編訳	みすず書房	1959	521p	ヘ22・8056・1
26	〃 2	〃	〃	〃	414p	ヘ22・8056・2
27	〃 3	〃	〃	〃	289p	ヘ22・8056・3
28	替女＝盲目の旅芸人	斉藤真一	日本放送出版協会	1973	294p	ヲ6・4374
29	わたしは替女——杉本キクエロ伝——	大山真人	音楽の友社	1977	318p	ヲ6・4498
30	天使をこの手に 光の世界を阻まれた一盲人 の記録	ロバート・ラッセル 佐伯わか子訳	みすず書房	1975	300p	ヌ10・5394
31	父よ母よ、僕はいま ある全盲青年の生き方 (三一新書889)	真野博行	三一書房	1978	191p	ヌ6・8497
32	人と業績——盲先覚者の偉業をたずねて——	川野楠己	日本盲人福祉研究 会	1984	172p	ヌ5・5865
33	一粒米〈復刻増補版〉愛媛文学叢書 2	森恒太郎	青葉図書	1977	337p	
34	失明の世界から——感想文コンクール入選作 品集—— (日点文庫 No. 2)	本間一夫編	日本点字図書館	1977	69p	ト8・1783・2
35	欧米の盲人福祉をたずねて——世界盲人福祉 会議と欧米盲人施設 (日点文庫 No. 3)	本間一夫、加藤善徳	〃	1971	83p	ト8・1783・3
36	母と教師の往復ノート——ある盲児の成長記 録—— (日点文庫 No. 5)	下田知江、島筒睦子	〃	1980	84p	ト8・1783・5
37	点訳奉仕運動はひろがる——提唱者後藤静香 の思想と実践—— (日点文庫 No. 6)	加藤善徳編著	〃	1973	73p	ト8・1783・6
38	盲学校物語 (日点文庫 No. 7)	野地繁	〃	1977	73p	ト8・1783・7

	書名	著者名	出版者	出版年	ページ	分類番号
39	心うたれた盲人の著書——失明者たちの歩いた人生——（日点文庫 No. 8）	加藤善徳	日本点字図書館	1969	79p	ト8・1783・8
40	炎のおと——小森美恵子の歌と人——（日点文庫 No. 9）	小森美恵子	〃	1977	86p	ト8・1783・9
41	光の使徒ルイ・ブライユ——点字創案者の献身的生涯——（日点文庫 No. 11）	ジャン・ロブラン 沢田慶治訳	〃	1980	63p	ト8・1783・11
42	盲人福祉に生きる——生きがいを求めて40年——（日点文庫 No. 12）	加藤善徳	〃	1975	89p	ト8・1783・12
43	ゆ・け・に・ど・めの人生——絶望から自立への再出発——（日点文庫 No. 13）	木村竜平	〃	1972	79p	ト8・1783・13
44	風とかくれんぼう——盲児のためのラジオ作品台本——（日点文庫 No. 14）	大山弘	〃	1976	76p	ト8・1783・14
45	続・失明の世界から——随筆随想コンクール入選作品集——（日点文庫 No. 16）	下沢仁編	〃	1977	85p	ト8・1783・16
46	しずかな夜の子どもたち——盲ろう教育のものがたり——（日点文庫 No. 17）	ガブリエル・ファレル 各務房子訳	〃	1980	77p	ト8・1783・17
47	差別用語	用語と差別を考えるシンポジウム実行委員会編	汐文社	1975	367p	ホ2・6055
48	なぜ日本語を破壊するのか	福田恆存〔ほか〕	英潮社	1978	p.239-250	ホ2・6410

IV 本館所蔵身障者サービス関係参考文献（雑誌編）

	論文（特集）名	著者名	誌名	発行年月	巻（号）	ページ	分類番号
1	点字図書館の活動について	加藤善徳	図書館雑誌	1972・1	66(1)	p.34-37	サト19(55)

2	視覚障害者の読書環境整備を	視覚障害者読書権保障協議会	図書館雑誌	1972・3	66(3)	p.112-115	サト19(55)
3	特集・ハンディキャップをもつ人々のための図書館奉仕	篠崎セウコ〔ほか〕	〃	1974・2	68(2)	p.46-63	サト19(57)
4	失われた光と音を求めて	阿部保一	〃	1974・6	68(6)	p.215-216	〃
5	図書館における障害者サービスの現状	図書館雑誌編集委員会	〃	1975・1	69(1)	p.29-32	サト19(59)
6	著作権問題をはねのけ、視覚障害者の読書権を守って下さい	視覚障害者読書権保障協議会	〃	1975・7	69(7)	p.288-291	サト19(60)
7	国立国会図書館に問う——国立国会図書館の文献録音サービスをより充実させるために	障害者サービスを考える会	〃	1976・5	70(5)	p.164-167	サト19(61)
8	障害者サービスを考える会の批判と疑問に答えて	国立国会図書館	〃	〃	〃	p.167-170	〃
9	公共図書館における障害者サービス論——対面朗読以前の問題として	佐藤敏江	〃	1977・3	71(3)	p.146-147	サト19(63)
10	特集・国際障害者年を迎えて——図書館・学	八代英太〔ほか〕	〃	1981・1	75(1)	p.13-31	サト19(71)
11	米国公図書館の障害者サービスを訪ねて	河村宏	〃	1981・5	75(5)	p.264-265	〃
12	障害者サービス関係の文献から〔紹介〕	大森妙子	〃	1981・12	75(12)	p.778	サト19(72)
13	目で見える公共図書館1981——東公図「障害者サービス調査」を終えて	大橋正枝	〃	1982・1	76(1)	p.18-19	サト19(73)
14	特集・図書館事業の振興方策(第一次案報告)をめぐって 点字図書館界として望むこと	糸林保夫	〃	1982・2	76(2)	p.92-93	〃
15	国際障害者年記念事業の総括(中間)と今後の展望	河村宏	〃	1982・3	76(3)	p.166-167	〃
16	日本目録規則新版予備版——録音資料(案)	〔日本図書館協会〕目録委員会	〃	〃	〃	p.168-170	〃
17	点字・録音・拡大資料等の相互貸借に関する申合せについて(答申)	昭和56年度全国点字図書館長会議	〃	1982・4	76(4)	p.189-191	〃

	論 文 (特集) 名	著 者 名	誌 名	発行年月	巻 (号)	ページ	分類番号
18	点字・録音・拡大資料等の相互貸借に関する 申合せについて (答申)——統——	昭和56年度全国点 字図書館長会議	図書館雑誌	1982・5	76(5)	p.247	サト19(73)
19	点字図書館の現場で	遠藤修司	〃	〃	〃	p.277	〃
20	障害者サービス委員会関東地区小委員会 昭 和56年度活動報告	田代守	〃	1982・8	76(8)	p.526-527	サト19 (74)
21	昭和57年度 全国図書館大会への招待——第 8分科会・障害者サービス	藤井千年	〃	1982・9	76(9)	p.590	〃
22	点訳のための手引書紹介	田中章治	〃	〃	〃	p.607	〃
23	点字図書・録音図書全国総合目録 1981(I)	市橋正晴	〃	1982・9	〃	p.607	〃
24	IFLA/RTL B (盲人図書館会議) の印象	河村宏	〃	1982・11	76(11)	p.717	〃
25	会員の声による全国図書館大会報告 第8分 科会・障害者サービス	河井貞子 [ほか]	〃	1982・12	76(12)	p.805-807	〃
26	公共図書館における障害者サービス——河野 論文にたいする見解——	田代守	〃	1983・1	77(1)	p.47	サト19(75)
27	昭和58年度全国図書館大会への招待 第10分 科会・障害者サービス さまざまな障害者の ためのサービスを考える	藤井千年	〃	1983・9	77(9)	p.587	サト19(76)
28	シンポジウム記録〈概要〉宅配について考え る 内部障害者の図書館サービス	〔日本図書館協会〕 障害者サービス委 員会	〃	1983・11	77(11)	p.724-727	〃
29	昭和58年度 全国図書館大会ハイライト 第 10分科会・障害者サービス さまざまな障害 者のためのサービスを考える	田代守	〃	1984・1	78(1)	p.22	サト19(77)
30	大会決議: 図書館3大ツールおよび『図書館 雑誌』『現代の図書館』の点訳あるいは音訳 を求める決議	第69回全国図書館 大会	〃	〃	〃	p.34	〃
31	参加者の声 第10分科会・障害者サービス もっとマトをしぼって	松延秀一	〃	〃	〃	p.39	〃

32	障害者も図書館員になりたがっている	市橋正晴	図書館雑誌	1984・2	78(2)	p.79	サト19(77)
33	盲人図書館会議・世界は一つミュンヘン大会に参加して	高田剛	〃	〃	〃	p.89-90	〃
34	視覚障害者の権利要求	天満隆之輔	図書館界	1972・5	24(1)	p.1	サト186(20)
35	視読協とその視覚障害者の読書環境のビジョン	視覚障害者読書権保障協議会	〃	1972・11	24(4)	p.162-167	〃
36	特集・身体障害者への図書館サービス	渡辺勲 [ほか]	〃	1973・8	25(2)	p.61-73	サト186(21)
37	統一テーマ:「障害者と図書館」	塩見昇 [ほか]	〃	1976・3	27(6)	p.205-234	〃
38	障害者にとって図書館とは——対面朗読サービスの現状からみる問題と課題	前田章夫	〃	1979・7	31(2)	p.197-210	サト186(24)
39	障害者サービスと盲人司書の必要	樽谷明	〃	1980・7	32(2)	p.75-77	サト186(25)
40	障害者サービスの現状と課題——その理論的実践的飛躍をめざして	田中章治	〃	1982・5	34(1)	p.17-23	サト186(27)
41	都立中央図書館における視覚障害者奉仕	金子君代	ひびや	1973・9	111	p.7-9	サト228(9)
42	利用者雑感「視覚障害者奉仕」	橋本宗明	〃	〃	〃	p.10-11	〃
43	聴障害者と図書館の結びつきを作るために	河合洋祐	〃	1974・7	115	p.23-25	〃
44	都立中央図書館	滝田雅子	図書館の窓	1980・12	19(12)	p.138-140	サト291(5)
45	国際障害者年に寄せる期待——米国訪問を終えて——	河村宏	〃	1981・5	20(5)	p.49-51	〃
46	障害者サービス機器展と講演を終えて	〃	〃	1981・12	20(12)	p.122	〃
47	障害者学術文献録音サービスについて	学術文献録音事務局	国立国会図書館月報	1975・11	176	p.14-15	サト272(13)
48	国立国会図書館における視覚障害者図書館サービス	[国立国会図書館] 視覚障害者図書館サービス協力室	〃	1981・11	248	p.2-11	サト272
49	図書資料の音声化について——視力障害者に対する朗読業務	金子君代	東京都立中央図書館研究紀要	1977・3	8	p.33-48	サト338(2)

	論 文(特集)名	著 者 名	誌 名	発行年月	巻(号)	ページ	分類番号
50	身体障害者への図書館サービスの現状と問題点	渡辺 勲	現代の図書館	1975・9	13(3)	p.85-128	サト280(7)
51	視力障害者にとって図書館とは	市橋正晴	図書館と本の周辺	1977・7	4	p.123-126	サト377(1)
52	大学図書館におけるハンディキャップサービスについて	河村 宏	大学図書館研究	1978・11	13	p.25-32	サト332(5)
53	特集・障害児教育と学校図書館	宮城忠敬	学校図書館	1980・7	357	p.9-45	サト305(22)
54	探訪記——コロンビア区公共図書館内盲人・身体障害者図書館	北川和彦	参考書誌研究	1982・5	24	p.14, 48	サト337
55	大学論としての「障害者」問題——和光大学での体験と思索	篠原睦治	和光大学人文学部紀要	1980・3	14	p.53-66	サイ885(5)
56	点字と点字図書館	松本征二	圖書	1952・2	29	p.8-11	サイ184(12)
57	点訳奉仕者	本間一夫	〃	1953・12	51	p.1	サイ184(13)
58	日本点字図書館からの微光	大江健三郎	図書	1971・3	259	p.28-33	サイ184(40)
59	点訳図書とともに——祖母の失明から	小林康子	〃	1974・2	294	p.32-37	サイ184(46)
60	障害をもつ子どもに読書のよろこびを	小林静江	〃	1976・7	323	p.50-55	サイ184(51)
61	視覚障害者の読書——学習環境改善の運動について	田辺邦夫	〃	1977・3	331	p.37-43	サイ184(52)
62	思い出の点訳者	本間一夫	〃	1977・8	336	p.42-45	サイ184(53)
63	今感じていること	宮城まり子	〃	1978・1	341	p.33-44	サイ184(54)
64	弱視用拡大図書の現状と展望	弘英正	〃	1978・8	348	p.26-31	サイ184(55)
65	盲人と晴眼者	佐江衆一	〃	1979・12	364	p.8-12	サイ184(57)
66	はじめてのころみ——『点字表記辞典』を完成して——	田中徹二	〃	1982・5	393	p.24-25	サイ184(62)
67	盲人のための著作権のテープ録音	半田正夫	ジュリスト	1978・7	668	p.100-105	サワ108(156)

68	特集・国際障害者年の法的課題	板山賢治「ほか」	ジュリスト	1981・5	740	p.10-115	サワ108(177)
69	法における「障害者」概念の展開(下)	笛木俊一	〃	1981・6	744	p.143-154	サワ108(180)
70	アメリカにおける盲人法律家 上	野村茂樹	〃	1981・12・15	755	p.102-112	サワ108(183)
71	〃 中	〃	〃	1982・1・15	757	p.84-93	サワ108(184)
72	〃 下	〃	〃	1982・2・1	758	p.129-136	〃
73	障害者と図書	小島椎孝	出版ニュース	1975・12 下旬	1028	p.26	サイ478(53)
74	視覚障害者の読書環境	田中章治	〃	1976・9下旬	1054	p.6-10	サイ478(56)
75	大型活字本を考える——“読みやすさ”とは何なのか	外山滋比古	〃	1983・2下旬	1278	p.4-9	サイ478(77)
76	四分の一の自叙伝	川島昭恵	新鐘	1983・12	32	p.19-22	サト288
77	日本の障害者教育	鈴木陽子	〃	〃	〃	p.71-77	サト288
78	点字図書施設の現状	本間一夫	學燈	1954・3	51(3)	p.17-19	サイ27(59)
79	点字と物言う本の家	ブレーク・クラーク	リーダーズ・ダイジェスト	1958・12	13(13)	p.139-148	サイ295(32)
80	「日本点字図書館」37年の歩み	本間一夫・緑川亨	世界	1977・8	381	p.137-163	サイ266(152)
81	著作権とその周辺——読書の秋と視覚障害者	阿部浩二	法学セミナー	1977・10	23(11)	p.102-103	サワ139(82)
82	視覚障害者の読書と著作権	土井輝生「ほか」	著作権研究	1978・12	7	p.45-61	サワ242(3)
83	視覚障害者と図書館サービス	北川和彦	びぶろず	1981・8	32(8)	p.276-289	サト181(23)
84	特集・言語の障害と社会参加	八代英太「ほか」	言語	1981・8	10(8)	p.22-67	サホ105(28)
85	特集・障害者への図書館サービス	河村宏「ほか」	丸善ライブラリーニュース	1981秋	120	p.1-8	
86	障害者の人権と生活保障	一番ヶ瀬康子「ほか」	ジュリスト 増刊総合特集	1981・9	24	398p	サイ271(12)
87	仕掛人——世界で初めての盲人向け副音声付テレビ番組の発起人、日本点字図書館理事長の本間一夫さん	〔サンデー毎日編集部〕	サンデー毎日	1983・2・20	63(9)	p.126-127	サイ398(325)

収集パンフレット（利用案内等）一覧

国立国会図書館

- ・視覚障害者録音サービスについて（協力依頼）
- ・国立国会図書館学術文献録音サービス利用申込書
- ・学術文献録音サービス受付機関名簿

日本点字図書館

- ・日本点字図書館事業案内
- ・点字一覧表
- ・盲人用具価格表

都立中央図書館

- ・利用のしおり－視力障害者のために－
- ・都立中央図書館案内
- ・録音テープ目録追補
- ・都立中央図書館，日比谷図書館要覧1979
- ・都立中央図書館事業年報 昭和57年度
- ・東京の障害者サービス・1983 —1982年度図書館利用に障害のある人々へのサービス利用調査—

港区立みなと図書館

- ・港区立みなと図書館
- ・図書館あんない
- ・港区立図書館だより 第22巻41号
- ・みなとの社会教育事業のあんない 昭和58年度
- ・港区新図書館建設基本構想・基本計画策定に関する答申 昭和52年8月22日

新宿区立戸山図書館

- ・区立図書館案内
- ・戸山社会教育会館・戸山図書館

埼玉県立川越図書館

- ・障害者奉仕業務関係資料集
- ・利用あんない —視覚に障害のある方のために— 録音テープ一覧
- ・利用あんない 1983年度 録音テープ追録

日野市立図書館

- ・日野市立図書館
- ・日野市立図書館のサービス実績
- ・くらしのなかに図書館を

財団法人いしづえ

- ・勉強ノート No. 1, 2
- ・就労の手引 No. 1
- ・サリドマイド問題関係年表
- ・みんなは今…'76 実態調査中間報告

東京大学総合図書館

- ・総合図書館利用案内 1983

学習院大学社会福祉研究会

- ・学習院大学への障害者受験